

<p>ピアノ部会長 八王子音楽院</p> <p><b>広瀬 美紀子</b></p> <p>〒192-0046 八王子市明神町 2-23-10</p> <p>Tel(042)656-2395 Fax-0312</p>	<p>理事 事務局次長 作曲部会</p> <p><b>橘 川 琢</b></p> <p>〒108-0073 港区三田 4-11-14-103</p> <p>Phone(090)2312-5620 Fax(03)3455-7238</p>
<p>理事 ピアノ部会</p> <p><b>並 木 桂 子</b></p> <p>〒176-0023 練馬区中村北2-2-13-301</p> <p>Phone(080)3003-2102 Fax(03)5241-8847</p>	<p>賛助会員 現代邦楽(箏)</p> <p><b>菊 地 悌 子</b></p> <p>〒157-0071 世田谷区千歳台 1-24-1</p> <p>Tel/Fax(03)3483-0583</p>
<p>ピアノ部会多摩アフリカセンター(NGO) 少年ケニヤの友(NPO)</p> <p><b>八 木 宏 子</b></p> <p>〒206-0021 多摩市連光寺 1-34-3</p> <p>Tel(042)374-3245 Fax-3038</p>	<p>昭和音楽大学 日本電子キーボード音楽学会</p> <p><b>阿 方 俊</b></p> <p>〒336-0022 さいたま市南区白幡 3-11-14-502</p> <p>Tel/Fax(048)862-9239</p>
<p>ピアノ部会</p> <p><b>田 中 真 理</b></p> <p>〒187-0041 小平市美園町 2-11-12</p> <p>Tel/Fax(042)308-8557</p>	<p>賛助会員 作曲/日本童謡協会会員</p> <p><b>穴 原 雅 己</b></p> <p>〒373-0809 太田市茂木町 1007</p> <p>Tel/Fax(0276)45-6317</p>
<p>ピアノ部会</p> <p><b>草 野 明 子</b></p> <p>〒174-0071 板橋区常盤台 3-20-3</p> <p>Tel(03)3960-1534 Fax-9887</p>	<p>声楽部会</p> <p><b>内 田 暁 子</b></p> <p>〒244-0801 横浜市戸塚区品濃町553-1 パークヒルズK-703 Tel/Fax(045)383-9488</p>
<p>賛助会員 作曲・ピアノ</p> <p><b>島 筒 英 夫</b></p> <p>〒184-0013 小金井市前原町 3-10-5</p> <p>Tel(042)381-0932</p>	<p>ピアノ部会</p> <p><b>新 井 知 子</b></p> <p>〒167-0042 杉並区西荻北 4-35-3</p> <p>Tel (03)5310-3989 Fax-5829</p>
<p>ピアノ部会</p> <p><b>太 田 恵 美 子</b></p> <p>〒182-0033 調布市富士見町 3-3-34</p> <p>Tel/Fax(042)482-4818</p>	<p>理事 ピアノ部会</p> <p><b>栗 栖 麻 衣 子</b></p> <p>〒360-0841 熊谷市新堀 275-8</p> <p>Tel /Fax (048)533-0183</p>

ピアノ部会 <b>田中 俊子</b> 〒211-0067 川崎市中原区今井上町 54 ガーデンテ ィアラ武蔵小杉407 Tel(044)572-9418	ピアノ部会 <b>白石 晶子</b> 〒310-0063 水戸市五軒町 3-1-14-802 Tel/Fax(029)231-5446
アドバイザー 声楽 国立音楽大学教授 <b>秋山 理恵</b> 〒165-0027 中野区野方3-29-11-402 Tel(03) 5380-1619	研究評論 機関誌編集スタッフ <b>湯浅 玲子</b> 〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-39-12 Tel/Fax(03)3315-0632 URL: <a href="http://www.ac.auone-net.jp/~reiko-y/">http://www.ac.auone-net.jp/~reiko-y/</a>
作曲部会 <b>小西 徹郎</b> 〒365-0057 鴻巣市幸町 3 - 5 Tel/Fax (048)543-4956	賛助会員 エレクトーン・作曲 <b>福地 奈津子</b> 〒183-0005 府中市若松町2-8-1 吉田ビル303 渡邊方 Tel/Fax(042)369-2988

## 日本音楽舞踊会議 2011年 新年会のご案内

【日時】 2011年1月7日（金） 18:30～21:00

【会場】 甘味茶寮「夢々 MuMu」

【会費】 5,000円

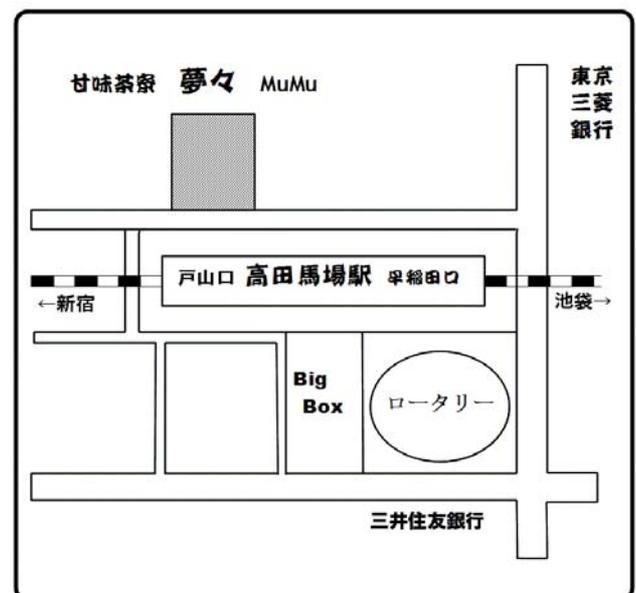
会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-4-34

電話：03-3368-6166

会場へのアクセス：

JR 高田馬場駅の戸山口を出て 右折。

50mほどの左側です。(地図参照)



# 音楽の世界

## 目次

<b>論壇</b>	科学と芸術の未来に向けて . . . . .	高橋 通	4
	～2011年を迎えるにあたって～		
<b>特集</b>	新春座談会		
	～いまの社会とこれからの日本音楽舞踊会議～		6
	助川敏弥・深沢亮子・秋山理恵・中島洋一		
<b>長期連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (34) . . . . .	狭間 壮	18
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (15) . . . . .	宮本 英世	20
	<b>音盤奇譚</b> (20) . . . . .	板倉 重雄	22
<b>エッセイ</b>	★人と音楽★ 再会～はるかなる青春の友	助川 敏弥	24
<b>音楽時評</b>	運命の謎 名曲副題の不思議	助川 敏弥	25
<b>コンサート評</b>	<b>ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ</b>	萩谷 由喜子	26
<b>コンサートレポート</b>	若い翼のための CMDJ コンサートⅢ		28
	出演者のつぶやき		31
<b>CD評</b>	<b>広瀬美紀子ピアノリサイタル2010</b>		33
<b>時評</b>	ウィキリークス問題などから見えてくるもの	木星人	34
<b>短期連載</b>			
	明日の歌を 第二回 稲原和雄氏に訊く(1)	橘川 琢	36
	音の科学と音楽 X-Ⅲ	大久 保靖子	40
<b>CMDJ</b>	会と会員の情報 . . . . .		45

## ～2011年を迎えるにあたって～

生命維持に関する新しい発見があり、最近話題になっている。西暦2010年12月、NASAが「地球外生命体探査に影響を及ぼす研究成果を発表する」という思わせぶりの予告をマスコミに流したので、宇宙人が見つかったと言う噂が巷間に溢れたほどである。

生命に必要な元素は、炭素、水素、酸素、窒素、燐（りん）、硫黄ということになっていたが、燐がなくても生命を維持出来る生物が見つかった。燐はDNAの構造を維持するために必須の元素であると考えられていたが、燐の代わりに砒素を使うバクテリアが米国のとある湖から発見された。正しくは、自然界で砒素を利用していた訳ではなく、その微生物を燐の代わりに砒素を与えた環境で培養したところ、猛毒の砒素への耐性があり、燐の代替えに、砒素を利用して代謝を行い、DNAの構造維持に使って生育したというものである。

これで、宇宙に置ける生命探査の条件が覆されることになった。今までは、先にあげた元素が欠けている天体には地球型の生命が存在しないとされ、探索から外されていたが、これを見直さなければならないことになった。

砒素が猛毒であることは科学者でなくともよく知られたことである。科学のレベルというよりもはるかに一般的な常識の範囲である。この常識が通用しない世界が存在するということが、マスコミを通じて世間に知れ渡ったのである。生物学どころか宇宙学とでも言うべき昨今の科学を根底から変えるような大発見かもしれない。科学を変革させるような大発見は、歴史的にみれば他にもいろいろとあった。ニュートンの万有引力、アインシュタインの相対性理論、古くはゼロの発見、等々。しかし、これらは突然ニュートンやアインシュタインが発見をした訳ではない。その発見に至る多くの研究がされている。例えば、特殊相対性理論は、アインシュタインが突然思いついたものではなく、ニュートン力学の法則はガリレイ変換に対して不変（どのような二つの慣性座標系でもそれらの見かけの速度が違うだけで、それ以外の力学法則は不変）であるが、電磁気学の法則はローレンツ変換に対して不変（真空中の電磁波（光）の速度（光速）が、座標系の採り方によらず一定）であるという矛盾、光速に近い速度では物体の長さが減少するという「ローレンツ収縮」



## 『いまの社会と、これからの日本音楽舞踊会議』

出席：助川 敏弥（作曲 本会代表理事） / 深沢 亮子（ピアノ 本会代表理事）  
秋山 理恵（声楽 本会アドバイザー 国立音楽大学教授）  
司会：中島 洋一（作曲 本誌編集長）

中島：本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。こういう機会はあまりないので、気楽におっしゃりたいことを言っていただきたいと思います。

まず、みなさんがお正月をどのように過ごされるかを、お訊きしたいと思います。

深沢：私の方は、お正月にはずっと前から深沢の兄弟、それと大野の方の弟の家族など含めまして10人くらい集まります。2日から4日までは、ずっとお客様続きで賑やかに過ごします。普段はみんな忙しくてゆっくり会えませんから、そういう機会に小さい人たちが成長した姿を見るのを楽しみにしたり、みんなが作ったものを持ち寄ったりしますので、私一人が働いているようなことはないんですけど。そして5日には私の後援会と郷里の東金市の親しい方々が毎年7、8人は訪れ、それも朝から美味しい物を作って持ってきて下さいます。そして、7日には音舞会の新年会がありますので、お正月の一週間は、訪れる方が延べ三十数人もおり、休める日が一日くらいしかないですね。

中島：では、助川さんはどのように過ごされますか。

助川：私は正月だからといって特別な過ごし方をすることはなく平常通りですが、最近の私的なことを話しますと、三井物産を辞めてケニアでNPOの自然保護活動をしている私の甥が、母親（私の姉）が亡くなったので、家族の歴史、つまりファミリーヒストリーを本にしたいと言いだしてね、私が長編を書いて、その他の家族関係者も色々書いて、本がもう出来上がる段階なので、正月に集まろうと話しています。その他のことでは、正月だからといって特別なことはありません。

中島：秋山さんどうぞ。

秋山：私は27日まで大学の冬季講習会がありますが、その後お正月は佐倉市の両親の元に帰りまして、3日まで家族孝行をしてまいります。何もしないというのが両親に対する孝行なんですけど。そして大学があるので、すぐ帰って来ます。

中島：私は毎年必ず31日に新潟の片田舎にある郷里に帰ります。普段別々に生活している親族が正月には郷里に集まりますので、多い年には14、5人が集まりなかなか賑やかです。そして3日に帰京します。

6日からは大学(非常勤校)がはじまり、7日は音舞会の新年会ということですね。

## 2010年を振り返って

中島：では、2010年を振り返って、変わったこととか印象に残ったことなどありますか。今度は順番を逆にして秋山さんから。

秋山：そうですね。大学の方が多忙になり、沢山仕事が増えたことと、国立の方で博士第一号を出したということで、そちらの方も充実させて行こうということで別の意味で責任が重くなり、なかなか自分の演奏が出来ないという悩みがあります。その一方、私の弟子達が大勢音舞会で活動させていただき、そちらはすごく充実しておりました。色々なコンサートに出させていただき活動の場が広がり感謝しております。

中島：では助川さんどうぞ。

助川：私はとにかく健康であることを祈り、一日無事で終わった時は天に感謝しています。本職の仕事の方はとても順調で、生きている限り仕事を続けさせてもらえることが有難いと思っています。いまは創作力旺盛ですが、私はこれまでの人生の経過の中で沈黙の時期が何回もあり、5年、10年と作品が書けない空白の時期があったので、圧縮すれば、いまは普通の人の50才くらいかなと思っています。

中島：次は深沢さん。

深沢：私は毎年いままで手がけなかった新しい作品に挑戦することを目標

にしていますが、今年はそういう機会が多く、6、7件あり、大変勉強になりました。例えば12月の後半、モーツァルト協会で呼んでいただき、二台のピアノの作品を演奏するとか、2011年にはヴァイオリンの中村静香さんと、私にとっては初めてのシューベルトの曲を入れてCD録音するなどです。暮れの音楽の友ホールでの、恵藤久美子さん、安田謙一郎さんとの三人の会では、必ず助川先生の新しい作品を演奏させて頂いておりますが、その他、昨年からはモーツァルトのピアノ・トリオを全曲弾いてみたいと思い、プログラムに一曲ずつ入れることに致しました。近年私の周辺では長く病気を患っていた主人が亡くなるとか、家族に次々と先立たれるとか、



左：秋山 理恵さん 右：助川 敏弥さん

撮影：中島洋一編集長

その間は色々な事で大変だったのですが、少し心配事から解放されて、自分の時間が持てるようになった気がします。その一方、大病をするわけではないのですが、目が悪くなるとか、寒さに弱くなるとか、体の方が衰えて来ていますので、助川さんがおっしゃったように、健康に注意して、自分のやりたいことを一つ一つこなし、充実した時間を送れば良いなと思っていますところです。また弟子たちもそんなに沢山いる訳ではありませんが、それぞれみんな勉強してくれていますし、音舞会にも何人か入れていただき、活動の場を与えてもらっていますので、感謝申し上げます。

中島：さて、私の方ですが、4月に前の編集長がリタイヤして編集長の仕事をお受けしたことで、かなり忙しくなりました。その分、いままで、やっていたコンサート、研究会の企画やホームページの仕事を減らしてもらえる訳ではないので、忙しくなり、計画している二つの大作、オペラと、舞踊を含んだ舞台芸術の創作が進まないのが悩みのです。先ほど、助川さんは、ご自分を実質の年齢は50才とお話しされていましたが、私の方は随分まわり道しているので、実働年齢はやっと30才程度で、まだやりたいこと、やらなければならないことが少なくみても半分以上は残っているのですが、年のせいか、朝早く起きると夜になると眠くなって来て何も出来なくなります。やはり若い頃とは違い、無理がきかなくなって来ていますね。今は、時間が欲しいです。

### **最近の日本音楽舞踊会議の活動について**

中島：みなさんのお話を伺いましたが、健やかに過ごしてご自分のおやりになりたいこと、やらなければならないことに対して意欲的に取り組み続けているのを確認し、立派だと思いましたし、また頼もしくも感じました。今は我が国の経済も社会も行き詰まり状態にあり、本会のような芸術文化団体が活動を続けて行くこともなかなか困難になって来ておりますが、協力出来るところは協力して難局を乗り越えて行ければいいですね。ところで、日本音楽舞踊会議の活動で最近変わって来ていることがありますか。まず、ピアノ部会の活動から、お話を伺いたと思います。ピアノ部会はもともと、熟年層、壮年層が厚かったところ、最近は若い会員が増え、充実して来ていると思いますが。

深沢：ええ、ピアノ部会のコンサートでも、今年は13人の方が出演なさったのですよ。部会員の数は多いんですけど、育児が忙しいとか色々な理由で、いままでは積極的に参加される方は7、8人に絞られるという印象だったのですが、子供も大きくなったので今回は演奏させて下さいという方がいたり、若い方は若い方なりに一生懸命に勉強を積み重ねており、みなさん、なかなか良い演奏をされていたと思

います。若い方が増えて少しずつ世代交代が進む中で、いままで家庭にしばられて中々活動が出来なかった年長の方、そして若い方々の中から積極的に音楽活動に参加しようという方が増えて来ているのは良い傾向と思います。

**中島：**次は声楽部会ですね。声楽部会は熟年層の方が多く、若人が少なかったのですが、この数年、秋山さんのお弟子さんを中心に若い方が増えて来たこともあり、全体的にレベルが上って来ていると思います。年2回開催する部会コンサートの他に、フランス歌曲のコンサートもありますし、5年前からオペラコンサートも毎年開いており、多くの聴衆を集め好評を賜っております。

**深沢：**私の生徒で前によく来ていた亀井奈緒美さんに、ピアノだけでなく、オペラを観たり聴いたりしなくちゃダメよと言っていたんですが、「先生のおっしゃっている意味が最近になってようやく判って来ました。いまは、オペラの伴奏をやらせてもらっていてとても幸せです。」とこの前、会った時に言っていましたよ。

**秋山：**私のところにも亀井先生は伴奏でお見えになっていました。

**深沢：**彼女がやりたい事に出会ったんでしょね。

**秋山：**私の生徒は、亀井先生のように伴奏をなさりながら、会の進行とか、どうやって人間同士の繋がりをもって音楽を作るか、ということをお話ししていただき、また別の意味で勉強になったと喜んでいました。声楽とピアノが一緒になって音楽を創る機会に恵まれ、とても良かったと思っています。

**中島：**『音楽の世界』11月号で助川さんが「日本の近代西洋音楽は、車の両輪の一輪が欠けたまま来てしまった」とお書きになっていますが、その指摘は当たっていると思います。オペラなど音楽劇のウェイトが低かったため、日本の西洋音楽は生活感覚に乏しく、一般の人々に親しみにくいものになってしまったと思います。そういうこともあり、オペラコンサートは続けて行きたいと思います。また、企画もずっと私が担当して、台本なども書いて来たのですが、将来さらに発展させて行くためには、企画においても後継者を捜す必要があると思っています。また、私の方は、他人の作品を再構成するだけでなく、新作を手がけてみたいと思っています。幸いに力のある若い人達が増えつつあるので、ベテランの方々の指導力をお借りしながら、若い人達の能力を引き出す方向に持って行ければ、オペラは本会の活動の中でも将来的に有望なジャンルになると思います。

**秋山：**ええ、しかし、会で催されているものの意義を、私の生徒を含む若い会員に判らせるところまでなさらないで、ただ参加下さいというだけでは、会の活動に参加する意義が判らなくて、どうしたらよいか迷う方が多いと思います。

**深沢：**特に声楽の方はね。

**秋山：**ええ、そこを埋めて下さると、もっと参加される方も増えると思います。

**中島：**おっしゃる通りで、こちらの努力が足りない面がありますね。

次は作曲ですが、部会長が代わったりして活性化はして来ていると思います。もう少し毛並みの違った人とか、芸大出身者なども勧誘して行きたいと思いますが、近未来の課題でしょうね。

それから弦楽器ですが、昔は毎年弦楽部会のコンサートがあったのですが、最近部会のコンサートを開いておりません。

助川：弦楽部会は開店休業というところですかね。

深沢：北川靖子さんが一生懸命にやって下さっていたようですが、お相手がいなくなったのでしょうか。

中島：吉川さん、繁樹さんなど、桐朋出の人が抜けてしまいましたからね。弦楽器も外の世界には若くて優秀な人が沢山いますので、まとめて入れたいですね。ただ、無理に入ってもらっても、すぐ辞めてしまうかもしれませんので、会の状況を考えながら、慎重に事を運ぶ必要があるでしょう。

とにかく、ピアノ、声楽は会員も増え、活性化して来ているのは事実ですが、仲間内だけで満足するのではなく、会の活動を外にアピールして行き、多くの方々に会の活動を知ってもらう努力が必要だと思います。そういう努力は少しずつでも効果を上げて行くものと信じます。例えば今年のオペラコンサートには、外部の方にも沢山聴きにきていただき、アンケートの回答も30通集まりました。これを読むかぎり、お客様も興味を持って鑑賞して下さったようです。

秋山：お客さんが沢山いらっしゃって凄かったですよね。

中島：えー、ちょっと入れすぎでしたね。

秋山：入れない方もいらっしゃったようですね。

深沢：チラシなど見せていただくんですけど、自分のコンサートと重なって伺えなくて残念なんですけど、実際に衣裳をつけて、歌って動きまわったということですか？

助川：寸劇風でしたね。

秋山：ええ、大道具も可愛らしくて、素敵でしたね。

中島：ええ、島信子さんと、その友人の菅原さんに作ってもらったんですけど、なかなか効果的でしたね。この会の活動もだんだん活性化して来ているので、それを外に向けてアピールして行くようにしたいと思います。

深沢：こんな風に、色んな方々が一緒になって作り上げて行くという団体は、他にはないですね。

## 時代・社会・政治との接点について

助川：私はこの会で一番の古顔になってしまいましたが、創立時に入会して、一度

辞めて、また 1976 年に再入会しました。この会はもともと 60 年の安保反対運動がキッカケで出来た会です。安保が通ってしまったので、他の団体はどんどん解散したけど、この会は残った訳ですね。だから、その流れを受けて、この会には政治的主張の強い人が多かったのですよ。ただ、それから色々時代の変化があり、人の出入りもあり、いまは普通の文化団体になりましたけど、私は、歴史や社会、政治まで含めた広い視野の中で音楽を見て行くというこの会の伝統は残した方がいいと思うのですよ。

中島：もちろん、そう思います。

助川：去年は、ショパン、シューマン生誕 200 年というのを採り上げたでしょう。それなら、その人達が生きていた時代はどんな時代だったかということにも少しは触れてほしかったですね。二人が生きていたのはたかだか 50 年くらいでしょう。その時代に世界でどんなことが起こっていたかという程度のことなら、一時間もあれば歴史年表から書けるのではないですか。

中島：私も歴史などにも興味がありますし、その時代の芸術を深く見つめるには、そういうことまで認識を広げて欲しいと思うので、例えば、文化シンポジウムの企画も立ち上げたのです。

助川：シンポジウムをやらなくとも、プログラムで 1810 年から 60 年までどんな出来事があったかという程度のこと書いただけなら、僅かなスペースですむでしょう。

深沢：助川さんがショパンのプレリュードを 6 回に分けてアナリーゼなさった時、その時代に日本や世界で何があったかということをお書きになって下さって、私達はその時代に生きていたわけではないんですけど、ショパンが生きていた時代はこういう時代だったんだなということがよく判ってとても興味深く、いまでもその時いただいたものをもってあるんですよ。

中島：それは出来ますけどね。ただ、催物について、今は実行委員制になっていて、プログラムも含めその企画については、実行委員に一任する方式になっているのですよ。ただ、そういうものを加えるようにと、私あたりから示唆することは不可能ではないでしょうが。

助川：そういうことを加えるのは、会の中央的な方針として打ち出してもいいのではないですか。1849 年にショパンが死んだ。



深沢 亮子さん

撮影：中島洋一編集長

その前の年にはマルクスが共産党宣言を出しています。そして1849年にはアメリカのカリフォルニアで金鉱が発見されている。幌馬車に乗った人達が西へ西へと押しかけた。その時の轍の跡がまだ残っている。この人たちを「フォーティナイナーズ（49年の人々）」と言って「オー・マイ・ダーリン・クレメンタイン」の歌にもこの言葉が出て来ます。多分拳銃の撃ち合いもあったでしょう。ショパンがパリのバンドーム広場で最後の時を迎えようとしている時に、カリフォルニアの溪谷では拳銃の音が響いていた。そして、それから三年くらいたつと（1853年）日本の浦賀の沖にアメリカ艦隊が姿を現す。世界は激動の時代に向かっていて、そんな時代だったですね。

中島：ええ、それから1948年にはフランス2月革命が起こり、ヨーロッパ中に飛び火しますね。

深沢：秋山：そうですね。

助川：いったい「ロマン派」とはなんであったか、考えてみる必要がありますね。ただ、夢を追っていたのではなく、社会が激動していて、それが刺激と活力になっていたのでしょうか。

中島：勿論そうですね。ロマン主義とは現実に対する様々な意味でのレジスタンスだったと思います。そういう中から、やがてリアリズムも生まれてきます。例えばビクトル・ユーゴーのような人は、ロマン主義から次第に人道主義、社会主義的な思想に傾いて行きますし、そういう風に広く認識して行かないとその時代の芸術が見えてこないと思います。

秋山：そうですね。ユーゴーは詩人というより、政治家だった訳ですから、そちらから入って行かないと政治的な皮肉を込めた彼の詩が理解出来ないと思います。

助川：そう、社会的な背景まで掘り下げて行かないと。そういうことが出来るのがこの会の特徴だから。

中島：フランス歌曲のコンサートの時、ユーゴーの話も出ましたね。

秋山：そうです。それで、今年、先生（中島）が作曲法的なことで、印象主義とか、象徴主義とかおっしゃられた時、今度、また文学、哲学のことまで広げて、歌を歌ったり、作曲の意図を解説したりするような会を作ると、もっと深まるのではないかなと思いました。

助川：そう、面白くなるんですよ。200年前の1810年というと、日本では国定忠治が生まれた年です。「赤城の子守歌」を一緒にやってもいいわけですね（笑い）。

秋山：（笑いながら）そうですね。そういう風に一つのことに留まらない面白い会があってもいいな、と思います。

中島：あまり堅苦しくならないで、面白い話を入れて行くとか。

助川：こういうこと言いたいですね。現実と音楽は違うと言うけどそうじゃない。対

照の美学という原理がある。大きいもの、と小さいもの、激しいものと、やさしいもの、それを対比させたとき、それぞれの特性が強調され浮かび上がる。井上靖の『氷壁』という小説の中で、青年が人妻と恋をする。主人公の青年が、「死ぬ前にあの女を一度穂高の氷壁の前に立たせたかった」、というところがあります。巨大な氷壁の前に、美しい女性が立つとき、それが素晴らしい。だから音楽も、音楽だけ考えるんじゃなくて、ショパンとマルクスの共産党宣言、カリフォルニアの金鉱発掘を一緒に考えていくと立体的な光景が見えてくる。

中島：おっしゃることには賛成ですが、そういう試みをするなら、音楽家だけではなく、文学、歴史、政治に造詣の深い人他の分野の人もメンバーに加えたいですね。

助川：そっちの方に深入りするのとも考え物ですがね。

中島：しかし、面白いのはいいけど、浅くはしたくはありませんから。

秋山：ええ。

中島：ただ、音楽をやっている人や、一般の人にも判りやすい内容にはしたいですね。

深沢：そうですね。

助川：ほかの音楽文化団体、例えば「YAA」なども学者を呼んで、「ショパンとその時代」などということをやっていますよ。

中島：最近亡くなった劇作家の井上ひさしが、難しいことをやさしく、やさしいことを深くと言っていますが、それを指標にしたいと考えています。

助川：それには、それだけの感覚がないとだめだね。

中島：でも、浅いものにはしたくありませんね。難しいから深いとは言えないけれど。

## 科学とテクノロジーについて

助川：問題の提起が面白くなくてはだめですね。ある昆虫学者が、「日本の高校の教科書はなんでこんなにつまらないんだろう。」と言っていました。

深沢：秋山：そうかもしれませんね。

中島：私の中・高等学校時代は、国語の授業、歴史の授業は嫌い、しかし、文学や歴史は好き、理科の授業も面白くないが科学は好きと言うことで、自分でやる方が面白くて、いまもそうかもしれませんが、昔から日本の学校教育はあまり面白くないでしょう。(笑い)

助川：面白くないね。先生が何の感激もなく、ただ話しているだけだから。(笑い)

中島：それもそうですが、先生自身があまり深く判っていないのでは。(笑い)

助川：それもあるか。(笑い)

深沢：そうですね。（全員笑う）

助川：ところで、ちょっと脱線するけど〔フランケンシュタインの怪物〕という小説、シェリー夫人が書いたでしょう。あれは1818年のことで、まだベートーヴェン存命の頃ですよ。科学技術の暴走を語ってるんですね。

秋山：ええ、それは判ります。

助川：自分が管理できない物を作ってしまうことの恐ろしさ・・・核兵器もそうです。

中島：核兵器だけではなくて、遺伝子組み換え技術なんかもそうですね。バイオテクノロジーがすべてだめだという訳ではないけど、使い方を誤れば大変なことになります。

助川：それで金儲けしようという人が出て来るからね。

中島：人間はそういう欲望に取り憑かれる動物でしょう。

助川：欲望が全部だめだという訳にはいかないですね。それを否定すれば活力のない社会になってしまう。

中島：ええ、そうですね。科学技術、経済、政治、文化をトータルに捉えるマクロな哲学が必要でしょうね。そして、社会がおかしな方向に行きそうな時には警鐘を鳴らす必要がある。我々の雑誌も、ささやかながらも、そういうことが出来る雑誌にしたいと願っています。

## 世相について

助川：世の中がせち辛くなって来たせいかな、多くの人が金儲けだけに走る世の中になって来ましたね。本来の資本主義には利益が上がった時には社会に還元するという理念があった筈だけど。だんだんそうじゃなくなって来た。

秋山：そうですね。

中島：それでも、アメリカなどは営利主義が蔓延っている国のように見えるけど、成功者は利益を社会に還元すべきと言う気風はまだ残っていますよ。

助川：うん、まだ残ってはいますね。ビル・ゲイツだって福祉事業に力を入れているし。

中島：日本だって、良心的な企業や経営者は社会に還元しようという姿勢は持っていますよ。村上ファンドの村上氏のように金を儲けても社会に還元しない人もいますけど。

深沢：でも、そういうことに気がついて、社会に還元しようと沢山寄付をしたり、貧しい国の子供たちを助けようとかいう気運はどっかにありますよ。私が所属している会や他の会にもそういう方々が大勢いらっしゃいます。

中島：もちろん、そうです。

助川：このあいだ、オバマが健康保険制度の改革をやろうとして反対されたでしょう。競争社会なんだから、負けた者は自分が悪いんだからそんな人を助ける必要はない、そういう思想があの国にはありますね。

中島：確かにアメリカ人にはそういう考え方がありますね。日本人にはあまり馴染めない考え方でしょうが。ただアメリカ人はみんなが同じ考え方するというのではなく、必ず違った考え方が存在しますから。

助川：うん、それはローデン・千恵さんや、小田実も言っているよ。あの国には復元力が働くとね。

中島：日本人の場合は、わりに一方向に流されやすい傾向がありますね。

助川：だから生誕 200 年祭というと、どこもかしこも、ショパン、シューマン一色になる。私たちの年代は、昔の「日の丸行進」を思い出して嫌ですね。

深沢：そういう性格が日本人の中にあるんでしょうね。

中島：ですから、そういう風潮に一石を投ずるために、今年が生誕 300 年だったペルゴレージの写真を今度発行される 12 月号の表紙に掲載したのです。

深沢：生誕 300 年だったのですか。

中島：みんなの関心がショパン、シューマンの方に行ってしまい、ペルゴレージはほとんど忘れ去られていましたね。

## よりよい芸術を求めて

助川：作曲部会の話が出ましたが、この前、秋に、ウィーンの CD 会社、VMM からシュエーンベルクの「月に憑かれたピエロ」の新しい CD が来たので、作曲部会で聴く会をやりました。語り手が、ミュージカル映画の中で、「マイ・フェア・レディ」のオードリー・ヘプバーン、その他、モンロー、デボラ・カーなど有名スターの裏の声を歌っていたマーニ・ニクソンという人です。演奏も録音も素晴らしくて、聞く前は、退屈な曲だから途中で止めようと言ってたんですが、最後まで聴いてしまいましたよ。その後、飲み会で正岡君なども出てとても面白かった。こういう会は、「現音」や「協議会」などではやっていないでしょう。

中島：そうですね。また、時には音楽家だけでなく、交流を広げて、他のジャンルの芸術家とか学者などを交えても面白いかもしれませんね。

助川：そう、人の交流が大事ですね。

秋山：もう一つ、いままでお話しを伺っていて、先生方の凄い知識を、もっと若い人たちに、お聞かせ願いたいと思います。なぜかという、今の時代は技術勉強ばかりで、その背景にある心の問題とか、そこから生まれた哲学とか、ファンタジーとか、そういうことが希薄になってきたように思われます。

深沢：実は 3 日後に一緒に演奏する、ヴァイオリニストの中村静香さんからお聞き

した話しですけど、この頃の学生の中には、図書館からヴァイオリンのパートだけをコピーして、ピアノのパートがない楽譜を持って、レッスンに来るんですって。また一冊買うと高いからということらしいですけど、少なくともピアノのパートも一緒になっている曲なんだから、両方分かっているじゃなきゃ勉強も出来ないじゃないんでしょうかね。本当にそういうところがおかしいと思いますね。

秋山：実際、楽譜を買うことによって、その曲に愛着をより強く持てますし、それがやがて自分の血となり肉となって還元されて行くのですが。

深沢：色んな事が、そこから学べるじゃないですか。

中島：せっかちで浅薄な成果主義に毒されているのでしょうかね。

深沢：それじゃ本当の成果は上がらないでしょう。

秋山：それを教えてくださる方も少なくなってしまったし、技術とともに心を教えることが、今は課題なんです。でも、そういうことを若い人たちに伝えて育てるということも、素晴らしいことだと思います。以前、こちらの演奏会の練習の時、先生方が作曲したものを、歌い手側に、これはこういう風に作曲したから、こういう声で歌って欲しいとご説明くださったそうで、そういう時に作曲の方が、この和声から、この音から、この詩から何を感じて作ったかを教えてくださったそうです。それを音楽会で聴くより、マスタークラスのように、それを見せてくれる会というのが凄く大事で、作曲家の思いを伝えてくださり、また伴奏の方がそのパートをどうテクニク的に弾きになるとか、そういうことを歌の人を含めて、みなさんでやる会をつくると、とても広がると思います。

中島：一つは音楽の解釈とか、さらにそれを超えた世界まで広がると思います。そういうことは、やりましょう。

秋山：ええ、学問でもあり、演奏でもあり、思想でもあり、生き方でもありという広がりを持たせて…

深沢：折角、作曲家の方がいらっしゃるのだから、ご本人から直接色んな事を言っていただけると、若い人達にとってとても勉強になるでしょう。私も、若い頃に助川さんから随分色んなことを教わりましたよ。

助川：今日は演奏家の方がおられるから言いますが、大局的に言って、社会主義が滅び、資本主義だけになったでしょう。競争社会になって、クラシック音楽の方も競争社会になりましたね。

中島：悪い意味でそうですね。

助川：コンクール至上主義になってね。人生の競争に勝った人だけが残るわけですよ。

深沢：音楽は競争ではないですものね。

助川：だから、みんな勝利者の歌を歌う。しかし、世の中には傷ついた人や、弱った人もいる。昔のカザルスとかティボー、フルトヴェングラーなどは、そういう弱

い人、悲しむ人の心をなぐさめ、励ます音楽を聴かせてくれた。ヨーロッパのオペラ指揮者だって、昔は手伝いからやって副指揮者になって、転勤を重ねて、それからメジャーなところに行くわけでしょう。今はコンクールで即席栽培。

中島：でもその結果、コンクールで優勝した演奏家が大家に育たないということもありますね。

秋山：コンクールで終わってしまうんですね。

中島：技術があっても、自分が何を訴えて行くかというものが無いからでしょう。

助川：若いタレントを早く商品化しようという資本の原理がある訳ですね。やはり資本主義（商業主義）ですね。

中島：それはありますね。ですから、そういう風潮に対して、ものを申したり、それと違ったものを示して行く必要があるでしょうね。ただ、社会的に成功したとしても、デリカシーがあれば、心の傷を負うこともあるし、悲しみや苦しみを感じ、魂の深い部分を見ることも出来るでしょう。そうでないと、浅くなってしまいます。

秋山：私は、最終的に見れば結果を出さなければ良い演奏家と認められないのですが、そこに至るまでの過程が最も重要であると思っております。そうでなければ、実利主義になってしまうでしょう。

助川：そう、マスコミも実利主義に走り、目立つ物だけを採り上げる。

深沢：でも、前からそういう傾向があるんじゃないですか。

秋山：深沢先生や助川先生のように、そういうことではなく一生懸命に色々な事を磨かれ、それが楽しみであり、苦しみでもあり、色々なさってきた結果が、自然と溢れて来るのが、本当の音楽家だということ、若い人に伝えて行く必要があると思います。

中島：そうですね。無理に押しつけるのではなく、巻き込んだり、引き出すようなやり方がいいですね。

秋山：そうです。

助川：『音楽の世界』などに書くだけでもいいんですよ。

秋山：ちょっと提示してあげるだけでもいいと思います。

中島：今、本会は「文化創成！」のスローガンを掲げて活動していますが、みなさん方の、色々なお話から、この会の進むべき方向もかなり見えて来たと思います。好ましい文化のあり方を求めて活動して行くこと、好ましくない傾向に対しては言論を通して警鐘を鳴らして行くこと、いずれも、「文化創成！」の目的に沿った活動だと思います。新しい年を迎えますが、みなさん個人、個人の更なるご活躍をお祈りするとともに、この会をより有意義な活動の出来る会にするため、ご協力をお願いしたいと思います。では、良い年をお迎えください。

(2010年11月30日 玉川田園調布の深沢邸にて収録)

## 私は、と書きはじめて

私は、と書きはじめてペンが止る。「私」という漢字である。「わたくし」でも「わたし」でも、読みはどちらも“可”ということなのだ。もとはと言えば「私」の訓読みは、「わたくし」となっていた。いつの頃からか、「わたし」も通用するようになっていて、辞書にもその両方が記されている。使い分けが曖昧になっている。

そして、この度“常用漢字表改定”にともない「私」の訓読みは「わたくし」、「わたし」その両方とも“可”のお墨付きを得た。しかし、「わたくし」と「わたし」では使い方が違う。そこでわたしは、どう読まれてもさしさわりが無い場合にのみ漢字の「私」を用いることにしている。いきおい「私」の出番は少なくなった。

私事（しじ・わたくしごと）を「わたしごと」と読んでも“可”、となってしまうことにもなりかねない。私儀にしても同じこと。わたしと読まれたら思いも伝わりにくからうし。

「私」の訓読みのことだけではなく、常用漢字は時代の求めにも応えなければならず、この度の改定は、パソコンや携帯電話などのメール通信の普及の現実に即しての改定ということなのだ。1946年の1850字の制定から、1945字への改定、そして今回、5字削減の196字追加で2136字となった。

「現行表と、世の中の漢字使用実態との間に生じている『ずれ』を解消する」ことに主眼が置かれているとのことだ。その主旨での漢字の増減に、うなずけるもの、そうでないもの、と個人的な感想の違いはあっても、これでしばらくは運用されることになるのだ。パソコンもケータイメールとも無縁のわたしにとっては、辞書を引く面倒が増えることになるのだが。

その辞書のことである。作家の宮部みゆきさんは、辞書、事典好きだという。幼い頃から各種の事典に親しみ、『ことわざと名言の事典』を読んでいた、と思い出を語る。最近では寝る前に『三国志』の人名事典を読むのを習慣としてるのだそうだ。「小説とは違い、うねるような人間ドラマはありませんが、よく似た名前や難読漢字の多い登場人物たちと、ちょこっとお茶でも飲むように親しむことができます・・・」と、作家ならではのイマジネーションの世界に遊ぶ。



この一冊をとれば「広辞苑」だと、作家・曾野綾子さんが書いているのを読んだことがある。

「私の一冊」の中でだったか。クリスチャンの曾野さんであれば、聖書を選びそうなのに、と印象に残ってい

る。その「広辞苑」が改定されて第6版となった。3044頁、約4.5kg。厚くて重くて、実用には骨が折れる。本棚の飾りになってしまいそうな改訂版だ。

この「広辞苑」には、いささかの悔恨とともに思い出されることがある。友人の結婚のプレゼントにしたのだ。披露宴のスピーチの終りに、次なる言葉をそえて。「さて、お二人が交わしたであろう、そしてこれからも交わすであろう言葉のほとんどすべては、この中に詰まっています。この中からとりわけ多くの『愛の言葉』を見つけられますように・・・」

新郎新婦のテーブルに置かれた場違いな「広辞苑」。うれしくもなさそうな二人。あゝキザなことをしたものだ。再現ドラマのように、書いていてもモゾモゾとしてくる。それが意外に評判が良かったりして、別の友人にも同じように「広辞苑」の贈呈をしたのであった。若いって本当に恥ずかしい。

その友人達、ほどなくして二人とも離婚してしまった。「愛」よりも「憎しみ」の言葉をより多く見つけてしまったのか。いずれにしても余計なプレゼントをしたものだ。以後そのお節介はやめた。その友人達とも

縁が切れて40年以上たつが、未だに座りの悪い思い出の一つになっているのだ。

疾病（しっぺい）を「しつびょう」と読んでしまった現総理大臣だけど、鹵莽（ろもう）なんて難しい言葉には詳しいのだろうか。国会の答弁で使っている。未知の言葉に辞書を引いてみると、「荒れ果てた土地のこと」とある。これは難しくて、読めない。普通の暮らしでは出くわすこともないだろうけど。

新版の「広辞苑」（4.5kg）の中に詰る言葉の、はたして何g分をわたしは知っているのだろうか。常用漢字が196字追加されて、辞書引くのがますます億劫になるなんて、泣き事を言っている場合じゃないのだ。

さて「餅」も今回追加された1字だ。なにを今更と思うのだけれど、その材料になる糯（もちごめ）は選外だった。その糯を搗（つ）く、の字も見送られた。もっとも最近の家庭用の電気餅つき機は、もっぱらモチ米を搗かずにこねるだけである。そしてそれなりに美味しい餅ができあがるのだ。それで、いつでも餅が食べられるけれど、正月の餅は、やはり杵と臼で搗いたものが多い。

---

【筆者紹介】狭間 壮（はざま たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





**連載 名曲喫茶の片隅から** 宮本 英世

〔第15回〕ローマ大賞

「ぶらあぼ」という情報誌がある。演奏家の人にはおなじみだが、あれを見ると溢れんばかりの音楽会案内に混って、各種コンクール、オーディションの多さにもびっくりする人が多いだろう。勉強してきた成果を試し、世に出るきっかけを掴もうという、演奏家には見逃せない機会を案内しているが、国内に限らずコンクールというのはじつは世界中に数多く存在する。「ショパン」「チャイコフスキー」「ミュンヘン」「ロン＝ティボー」「パガニーニ」「ジュネーヴ」「エリーザベト」一などなど。ざっと数えても40以上が浮かび、わが国の「日本音楽」「海外派遣」「民音」などを加えると、正確にはいくつ位あるのか。まさにコンクールだらけといった感じである。多すぎるせいか、ヨーロッパでは権威が落ち、入賞してもニュースにならないという報告を読んだことがあるが、舶来崇拜の伝統が生きているわが国ではまだまだ盛ん。海外留学とコンクール参加は跡を絶たない。

演奏家にとってはともかく、作曲家にとってはどうなのだろう。世に出る場としてのそれは確保されているのかといえば、目立ったものはどうも少ないようである。ヴェニシアフスキー・コンクールやヴィオッティ・コンクールには作曲部門もあるらしいが、ほとんど話題になることがない。となると、持ち出さなければならないのは、フランスの「ローマ大賞」である。最近は

どうなっているのか情報が伝わってこないが、作曲界における知名度、権威の点からは、これこそ世界一！私たちに親しい名曲の作曲者にも、これを獲った人が大勢おり、じつは日本人も、という大変な賞なのである。

どんな賞かという、これはフランスの芸術アカデミーが毎年行なっているコンクールで、建築・絵画・彫刻・音楽の振興を促すのが目的。本来的にはフランス人のみを対象としていたが、音楽部門では1984年から外国人にも門戸を開き、その最初には何と日本人の佐藤喜美さん（桐朋音大→パリ音楽院卒）が一位を獲る、という快挙を遂げたのである

音楽部門についてももう少し詳しく紹介すると、対象者はフランスの東京芸大ともいえるべき「パリ音楽院」の学生に絞られる。応募者はカンタータを一曲提出することになっており、審査の結果、一位（つまり優勝）をとると、フランス政府から奨学金が出て、ローマ（イタリア）にあるフランス・アカデミーに留学することができる。宿泊先はフランスが買上げたメディチ家の別荘で、広大な森の中のコテージに滞在し、料理をはじめ世話をしてくれる使用人付きの、それこそ居心地のよいものだとか。そしてあれこれと学びながら、義務といえば成果としての作品を提出するくらいなもの。これが4年間も味わえるというのである。



第1回のローマ大賞は1803年、A.アンドロの「Aicyone」に与えられ、以後ベルリオーズ(1830)、グノー(1839)、ビゼー(1857)、デュボワ(1861)、マスナー(1863)、ドビュッシー(1884)、シャルパンティエ(1887)、ビュッセル(1893)、ラボー(1894)、フローラン・シュミット(1900)、リリー・ブーランジェ(1913)、イベール(1915)、ディティユー(1938) ーら、クラシック・ファンにはおなじみの作曲家たちが、続々とこれを獲得している。

忘れられないのは「ボレロ」で知られる

モーリス・ラヴェルで、彼は1901年に師のフォーレに奨められて挑戦するものの、惜しくも2位。翌年、翌々年にも応募するが獲れず、1905年にもう一度挑んだが、今度は30歳になっていたので年齢的に資格がないとして、参加を断わられてしまった。才能は周囲も認めていたので、とうとう問題になった。憤慨したフォーレに同調して新聞が取りあげ、作家・音楽研究家として有名なロマン・ローランも、文部大臣にあてて公開質問状を送った。

結局ラヴェルの参加は認められなかったのだが、審査にあたったパリ音楽院々長テオドル・デュボワをはじめ数名の教授たちが辞職に追い込まれ、院長はフォーレに代わったのである。賞への拘りから開放されたラヴェルは気分一新、次々と作品を書いて世界的になっていったが、1920年になって、そんな彼にフランス政府はレジョン・ドヌール勲章を授与しようということになった。しかしローマ大賞以来、賞というものに反感を持っていた彼は、これを断った。「私としては、これは純粋な虚栄だよ」と、友人に語ったそうである。

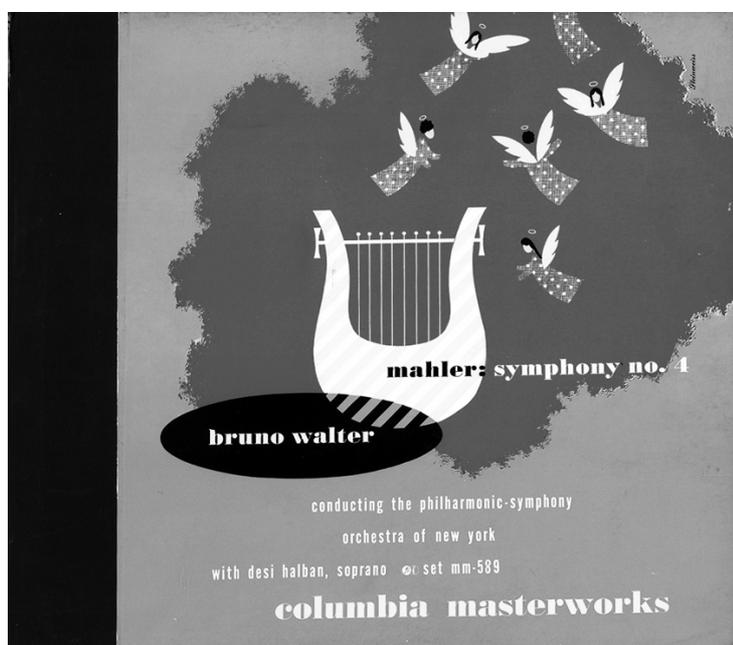
**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア(洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト(音楽出版部)、トリオ(現ケンウッド)系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」(東京・池袋)の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」(音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」(講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」(集英社)など多数。



## 第20回

## ハルバンとワルターのマーラー第4

昨年はマーラーの生誕150年、今年は没後100年にあたり、このところマーラー作品の演奏会、CDリリースが目立って増えている。私が阿佐ヶ谷ヴィオロンで共同主宰している「21世紀にこれだけは残したいSPの名演奏」でもマーラー特集を組み、交響曲第4番を1945年録音のワルター指揮ニューヨーク・フィル、デジ・ハルバン(S)のSP盤で演奏した。



この録音はLPやCDで幾度となく再発売され余りにも有名なので、改めて録音の意義を深く考えたことが無かったが、解説のため色々と調べてみると、興味深い事実が次々と明らかとなり驚かされてしまった。

まず1945年5月10日という録音日付。第2次世界大戦のドイツの降伏が5月8日である。1938年のアンシュルスによってウィーンを追われたユダヤ人ワルターが、師でユダヤ人のマーラーの第4をどんな感慨とともに録音したことだろう！ 5月

21日、ワルターは同様にウィーンを追われたアルマ・マーラーに手紙を書いている。「親愛なるアルマ！ 5月10日、ぼくはニューヨーク・フィルを指揮して第四をレコードに録音しましたが、美しいものになるだろうと思います。(中略) 将来の若い指揮者たちに対して、ぜひ何らかの拠りどころを示しておくためです。」(「ブルーノ・ワルターの手紙」白水社刊より)

次に共演のデジ・ハルバン(1912~1996)。彼女の母はマーラーが愛したプリマドンナ、ゼルマ・クルツ(1874~1933)。デジも母と同じウィーン国立歌劇場の歌手となり、ワルターとも懇意にしていた。その後、オランダ人の裕福な画商と結婚。1児を儲けて幸せに暮らしていたところ、ナチスのオランダ侵攻にあい、家族でイギリスに逃れる船上で灯火管制の暗闇の中、夫が転落死。未亡人となったデジは夫をリバプールに葬って、アメリカへ渡って歌手としてカムバックしたのだった。

ワルター、アルマ、デジにとって、この SP は単なる録音以上の意味があったに違いない。

●マーラー：交響曲第 4 番

ブルーノ・ワルター指揮ニューヨーク・フィルハーモニック、デジ・ハルバン (S)

[米コロムビア MM589] (SP アルバム)

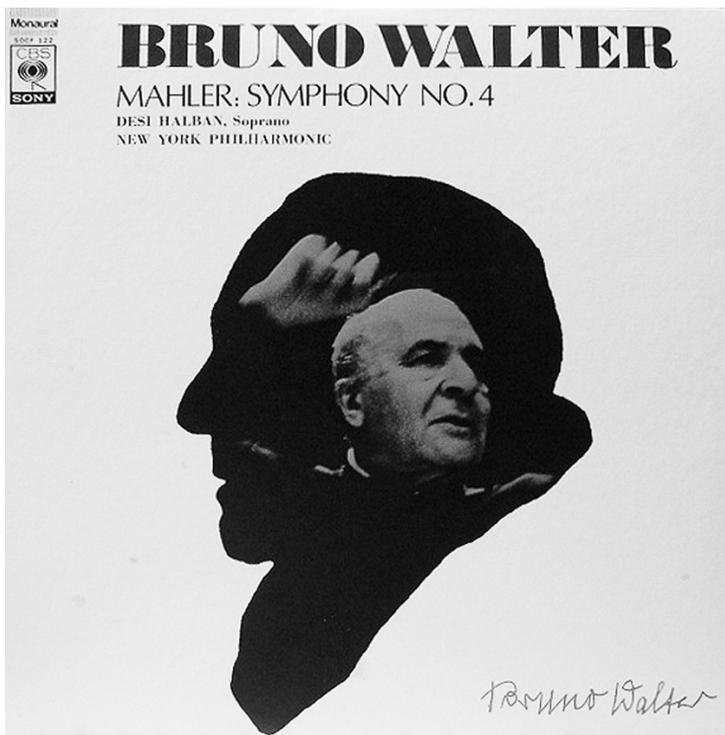
1945 年 5 月 10 日録音。SP では 6 枚組 12 面の大冊となる。解説書はマーラーの生涯についてアルマの夫フランツ・ヴェルフエルが、第 4 交響曲についてアルマ・マーラー＝ヴェルフエルが執筆している。

(前ページ 左)

●同上

[CBS ソニー SOCF122] (LP)

オリジナル SP 録音を LP に直したもの。私の少年時代に売っていたレコードである。「ワルターが第 4 交響曲の演奏を計画したとき、歌手はデジ・ハルバンときめて稽古をしておくようにいったという」との岡俊雄氏の解説が掲載されている。現在は NAXOS 8110876 などの CD で入手可能。 (このページの右上)



【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」(アルファベータ)を上梓。



◆『音楽の世界』2010 年 12 月号の訂正◆

P. 16 狭間壮氏の「音・雑記－ひなの里通信 (33) たかがカレーされどカレー」のサブタイトル「―― 前 11 時 30 分の誘惑 ――」を、「―― 午前 11 時 30 分の誘惑 ――」に訂正します。編集作業中に「午」の文字が欠落してしまいました。お詫びします。

目次で「浄瑠璃」となっていた、特集の高橋雅光氏の文の正式のタイトルは「浄瑠璃：語り物音楽の系譜」です。

## 再会 ー はるかなる青春の友

作曲 助川敏弥

永く生きているとこういうこともある。まれな体験であった。ピアニストのフジコ・ヘミングさん。××年ぶりに再会した。

昨年11月25日、フジコさんは仙台市近郊の多賀城市で私の曲「ちいさきいのちのために」を演奏してくれた。私は新幹線で仙台へ向った。賛助会員の湯浅照子さんの案内だった。照子さんは、畏友、故山本直純君の実妹であり、かねてからフジコさんと親しい。

会場練習の最中に現場に着いた。主催者から、本人が緊張しているので面会は終演後という申し出なのでそのまま謹聴する。本番は満席。会場中央に用意された席に私は着いた。私の曲の前にフジコさんはマイクをとり、私に呼びかけた。私が立ち上がると、彼女は大きな声で歓声をあげた。会場すべてが祝福してくれた。はるかなる青春の友、忘れ難い友人たちと過ごした若き日の仲間である。この時、一瞬にして、彼女も、また私も、はるかなる青春の日に戻った。

終演後、楽屋で会う。「イワキもナオズミも死んじゃったよ」と彼女は嘆く。いつのまにそんな時が過ぎたのだろう。ミラボー橋の下セーヌは流れ、時は過ぎ去り私は残る・・・その当時、私はバルトークに心酔していた。彼女は「あんな毛虫がこのような音楽のどこがいいのよ」と言っていた。その話をすると「私そんなこと言ったかなあ」と大笑。いまの私の音楽は毛虫ではない。フジコさんは気に入ってくれた。

フジコさんの日程は忙しい。東京とパリに居宅がある。一ヶ月の日本滞在のほとんどの日に本番。東京でもオペラシティの大ホールも東京文化会館の大ホールも満席。多賀城でも二日で券が完売。会場に置いた私の曲の楽譜もたちまち完売した。彼女は12月早々ロンドンへ向った。私の曲のViolinとpiano版をロンドンとパリで演奏してくれるとのこと。あの人も生き物を愛する人。亡き命を悲しむ心が分ってくれる。フジコさんと秘書役たち、照子さんは最終新幹線で帰京。私一人だけが仙台に残り夢の中にいた。

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)

有名曲に副題がつくことはよくある。しかし「未完成」とか「Jupiter」などは当然作曲者本人がつけたものではない。だから副題というより、愛称、俗称、つまり nickname である。

Beethoven の九つの交響曲の中で本人がつけた副題は、「Eroica」(日本名「英雄」と「田園」の二つだけである。第九は「合唱つき」と本人が表記しているが、これは副題というより付記みたいなものである。

そこで問題は第五番。「運命」という名前は本人がつけたものではない。しかしいまや正式の副題扱いですっかり広まった。昔はそうでなく「第五」で通った。「運命」という方が平俗で売りやすいので、企画主催者が広めたのだろう。かなり前に、この風潮について元NHK考査室の人で訳詞家としても著名な故青木爽さんが、確かN響機関誌の「フィルハーモニー」に「ついに運命に屈したか」という単文を書いていた。「運命」という副題を使うことに屈したか、という意味で俗化を皮肉ったのである。私の少年時代も「第五」だった。欧米でも同様と聞いた。

ところがここに不思議なことがある。戦後日本にアメリカ進駐軍が来た。彼等は日本の市民となじみになった。私の家にもよく何人か遊びに来た。彼等はアメリカの通販カタログを見せてくれた。メーシーとかの有名デパートのものである。あちらでは大手デパートも通販をしていたらしい。電話帳みたいな分厚く、ありとあらゆる品目が写真入りで載っていた。その中にレコードがあった。当然SPである。SPレコードは豪華な分厚いアルバムに入っていた。その中に「第五」があった。そして、ドイツ語の花文字で、「Das Schicksal」つまり「運命」と書いてある。アメリカの商品なのにドイツ語の飾り字で表記されているということは、この呼称がドイツ語圏でも有効であることを意味しているのではないだろうか。亡くなられた評論家の千蔵八郎さんが、やはりこの名称を使うのは日本だけだと書いておられたので、この話を手紙でお伝えした。しかしご返事は頂けないうちに亡くなられた。欧米では使わないということは事実ではなかったのだろうか。いまだに解けない謎である。

(助川敏弥)

## ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ

音楽評論家 萩谷由喜子

本格的冬到来のなか、一夜だけ寒さの緩んだ12月20日、月曜日の夕刻、東京神楽坂の音楽の友ホールを会場にピアノの深沢亮子氏、ヴァイオリンの恵藤久美子氏、チェロの安田謙一郎氏による『ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ』が開催された。3氏によるこのコンサートは2003年からはじまり、毎年続けられているから今回で8回目となる。客席には常連ファンらしき方々の姿も多い。ピアノはホール備え付けのベーゼンドルファー・インペリアル290。

幕開けは助川敏弥氏の小品3曲。最初の曲は『Afternoon』。オリジナルのピアノとヴァイオリン版から無伴奏ヴァイオリン用に編作された版だ。明るいパープルブルーのオーガンジー・ドレスに身を包んだ恵藤氏がひとりステージにあらわれ、静かに弓を操りはじめた。泰然として、どこかひょうひょうとした雰囲気の問題は午後の田園の空を悠々と滑空する鳶を思わせる。平和で物憂い午下がりの時間がゆるやかに流れていく。やがて新しい主題も出され、ピツィカート楽句が少しだけ静けさを破る。再び静謐な時が戻り、最後はスローなダウン・ボウの余韻のうちに結ばれた。

2曲目からはピアノとヴァイオリンのデュオなので、ヴァイオリニストはそのままステージに残り、ピアニストを迎える。深沢氏は黒地に真紅のポピーを散らしたトップに黒のボトム。両者の対照的なコスチュームがよく映える。曲は2009年に91歳の生涯を閉じたアメリカの画家アンドリュウ・ワイエスの絵画からインスパイアされた『草原の家』。

作曲者によればワイエスの絵は「田園の風景、その中の草一本までが丹念に画かれる。無人の小屋と草原、どこか、さびしく、しかも、不思議な懐かしさが伝わる」作品だという。その印象を音楽で綴った本作は、ヴァイオリンのゆったりしたな下行音型から歌いだされた。シンプルそのものの歌だ。一切の虚飾が排され、特殊技巧に頼ることもできないので、ヴァイオリニストは音の純度のみで勝負しなければならない。その苛酷な曲を恵藤氏は4本の弦それぞれの持つ固有の音色によって、色を塗り分けながら淡々と弾き進んでいく。対するピアノはきわめて控えめに和声を添える。響きのコントロールは非常に細やかだ。だから、聴く者の耳はヴァイオリンに集中しがちで、ピアノの存在をともすれば忘れてしまいそうになる。しかしながら、無人の草原にひっそりとたたずむ小屋という視覚的テーマは、やはりピアノのそこはかたない響きがあってこそ浮かび上がる。曲づくりの妙と、アーティス

トの演奏力がみごとに合致し、息をひそめて聴き入ってしまうような、ワイエス&助川の世界が目前に広がった。

一転、3曲目の『Vanessa』は華やかな1曲。前曲で抑制のきわみにあったピアノが、水を得た魚のように生き生きと動きまわり、ヴァイオリンと活気ある対話を繰り広げた。

続いて、深沢氏の独奏でショパンのスケルツォ第3番。こうした強弱のコントラストが鮮明で和音の強奏も要求される曲を、この縦長でヨコ壁が直に反響し合うホールで演奏するのは至難なことではなかろうか。しかも、置きステージがそのまま反響箱になるので、それは両刃の剣となりかねない。そうした条件のもと、深沢氏はベテランらしいタッチの選択を駆使し、つねにみずからの響きに耳を傾けて、響きと音色に配慮を重ねながら、曲の面白みをよく引き出していた。

第一部の最後は安田謙一郎氏の独奏で、バッハの無伴奏チェロ組曲第3番。エンドピンの刺し位置を充分に確かめ、それにあわせて椅子位置を決めてからおもむろに演奏が始まった。チェロ独奏にもあまり味方してくれないホール・トーンのなか、安田氏は肩の力の抜けた自然体でバッハと向き合った。技巧を誇示するでもなく、楽器の声を張り上げるでもなく、作曲家とのふれあいを大切にするかのごとき精神性の高いアプローチだ。だから、「朗々と楽器を歌わせる」類の華やかな演奏ではないが、耳が次第に安田氏の音に慣れて、味わいが感じられるようになっていく。氏の演奏自体も楽章を追うにつれて調子があがり、サラバンドあたりからエンジン全開。ブーレもよく流れ、ジグは白熱の盛り上がりを見せた。

休憩を挟んだ第2部は、一点豪華にモーツァルトのピアノ・トリオ第2番ト長調K.496。もちろん、アンサンブルの曲なのでソロと単純に比べることはできないが、なんと、ショパンのスケルツォにはあれほどやさしくない対応をしたベーゼンドルファーとホール・トーンが、別人のような名サポーターに変身したのは驚いた。このピアノは、ひたすらモーツァルトを愛しているらしい。ピアノがよい子になったので、もう何の憂いもなくなった。幸福感に満ちてピアノから歌いだされた第1楽章では、展開部のドラマも過不足なく表現され、アンダンテ楽章の中間部では短調の陰影が美しい。変奏曲のフィナーレでは、ヴァイオリンが毅然として高貴に歌い、寡黙に見えるチェロが要所を引き締め、ピアノは澁刺と弦2者を牽引した。結びの楽句のなんと晴れやかなことか！モーツァルトを聴く悦びがここにきわまった。

(はぎや・ゆきこ 音楽評論家)

12月2日に開かれたこのコンサートは2008年に始まり今回で既に3回目となる、音大卒業後のステップとして、若い演奏家への支援を当会全体で進めて行こうと云う趣旨を持つ。

当日の前半は声楽、ピアノ独奏を中心にチェロとピアノのデュオ等があり、休憩後の後半はオケ伴の代わりに2台のエレクトーンが加わる（指揮者あり）オペラのアリア、ピアノコンチェルト2曲演奏された。では次に当夜の演奏についての印象を簡単に述べて行こうと思う。

最初の、八坂寛子（sop）はよく曲全体を纏めていたがバッサ一ニでは高音部の声は良い感じだったのだが低音域に少し弱さがあるようでこれは今後の課題かもしれない。又、ヘンデルの「ジュリアス・シーザー」からの“辛い運命に涙は溢れ”では歌でありながら語る事の大切さがより意識されるべきと思われた。伴奏の竹内さや香（p）は適切なバランスで歌を良くサポートしていた。

次の大浪智紗（Sop）はベッリーニ「棄てられて」、ドニゼッティ「ああ美しいイレーネよ 思い出しておくれ」を歌った。声

量もあり、表情付けも丁寧で好感の持てる演奏だったと言える。但し今後の課題は、もっと語りどころ、物語性等に関して想像力を膨らませる事の必要性で、それをどうするかであろう。

3番目の前田佳代（Sop）が取り上げたのは山田耕筰の歌曲、「母の声」「中国地方の子守唄」「かやの木山の」「鐘が鳴ります」。勉強し、仕上げてきて真面目に歌っている印象を持ったがそれだけでは特に山田耕筰の歌曲では味が出ない。更に北原白秋の詩には独特の所

# 音楽現代

2011年1月号 定価1,050円

♪特集1 世界のオーケストラ、指揮者の現在（いま）  
～世界の主要 オーケストラ音楽監督・首席指揮者リスト付き

♪特集2 2011年に来日するアーティストたち  
～巻末来日アーティスト一覧表付き

♪新連載 没後100年記念

「音楽と絵画 マーラーとクリムト」（倉林 靖）

♪カラー口絵

- ・日生劇場「オルフェオとエウリディーチェ」
- ・新国立劇場「アラベッラ」
- ・和光市 童謡詩劇「うずら」
- ・豊田市コンサートホール  
ショパン・シューマン・リスト生誕200年記念「三大ピアノ協奏曲コンサート」&  
「ショパン・エッセンス・ガラコンサート」
- ・メータ「奇蹟の響演」
- ・関西歌劇団「リゴレット」

♪インタビュー

井上道義 中澤きみ子 アルベルト・ガザーレ  
三ツ橋敬子 成田達輝 エフゲニー・スドビン

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

作を伴う雰囲気があるので当然ステージでの内容からくる自然な演技も要求されよう。そのような、曲の持つ全体的な雰囲気表現が今後この人の考えなければならない問題点であろう。あと、これは日本歌曲を声楽家に取り上げる場合の大きな問題点だが発音は決してドイツ歌曲的でもイタリア歌曲的であってはならないだろうしその最も良い日本歌曲の歌唱を研究し練り上げて行くのも声楽家の勤めであると云う事をここに付け加えておこう。又、ピアノの山木千絵は良く行き届いた丁寧な伴奏で歌をサポートしていたがこの山田耕筰の曲等ではソリストを少々刺激する一面があっても良かったのではと思われた。

次はピアノ独奏曲でスクリャービンのソナタ第9番「黒ミサ」。これを弾いた小俣優衣はこの得体知れずの難曲のデテールをしっかりと浮き上がらせ目立った破綻もなく良く曲を纏め上げていた。好演と云って良いだろう。注文を付けるとすればスクリャービンの持つ神秘性、黒魔術性ともいえる怪しさ、未知性への表現がこの音楽には無くてはならないものなのだから、そこを突っ込んで発展させてほしいと云う事等である。今回の演奏に寧ろ健康な明るいロマン性を筆者が感じた故からの上記の注文だと受け取って欲しい。

5番目の東山洗雅 (p) もピアノ独奏。彼が取り上げたのはブラームスの初期のピアノ曲からバラード集全4曲。東山はブラームスの持つ叙情性と構成的特質を叙情や感傷に溺れすぎる事も無く、又、構築性を重視するあまりアカデミックな堅苦しい演奏に陥る事も無くごく自然に曲をとらえて弾いていたのでそれが却って均整の取れたブラームスの表現に結びついたと思われるし、好演だったと言っても良かろう。特に1曲目でのメリハリの付け方はかなり印象に残っており彼の曲に対する考えが明確に打ち出せていたようである。

この第1部の終わりが菅野真衣 (vc) と広瀬美紀子 (p) のデュオによるピアソラの「グラン・タンゴ」。ピアソラは既に没してから20年になるモダンタンゴの巨匠だが近年、クラシック、ポピュラーの枠を超えて様々なジャンルの演奏家に取り上げられている将にフュージョンとも云えるうへの作曲家である。その彼がチェロの世界的巨匠、ロストロポーヴィッチに捧げたのがこの曲である。ピアソラに面識の無かった彼は8年間楽譜を寝かせたままにしておいたがあるとき目を通してみてピアソラの才能に驚き早速演奏したと云う(しかし彼の演奏がレコーディングされているかは不明)。二人のデュオはピアソラの特徴ともなる力強いリズムとメランコリックな旋律性を持つこの曲を息の合った演奏で良く纏め上げていた。特にピアソラ音楽の持つリズムで打楽器的な局面では菅野のチェロと広瀬のピアノは良く呼応し合いテンションの高いデュオを作り出していた。しかし、一つ難点を云えばビートを強く打ち出す時ピアノの音量が大きくなりチェロの音が聴き難くなってしまった事である。これはホールの音響にも問題があるのかもしれないがピアノをステージ後方にもっと下げるとか蓋を閉めるとかによってある程度避ける事が出来たのではとも思えるのだがどうか。

休憩後のステージではオケ伴の代わりとしてエレクトーンの鈴木弥生、三浦美帆、指揮の桑原巖が加わりモーツァルトの「魔笛」より 夜の女王のアリア“ああ 恐れおののかなくてもよいのです、我が子よ”、“復讐の心は地獄のように我が胸に燃え”を齊藤希絵 (Sop) が歌い、シューマンのピアノ協奏曲の第一楽章を上埜マユミが、ラヴェルのピアノコンチェルト ト長調の第1楽章を牧山直子が弾いた。

魔笛を歌った齊藤は声量も豊かで高音域から中音域へのコロラチュウラも華やかな美しさがあり、的確だったし、透明感のある声の質等将来の可能性が十分に感じられた。彼女について欲を言えばもっとドラマ性等がステージ上での所作等を通じても発揮出来るように求めたいし、もっと音の遊びを楽しむ余裕を持てるよう研鑽して欲しいと思う。その時には大きな成長が見られるに違いない。それから、歌をしっかりと浮き立たせていた2台のエレクトーンと指揮の桑原の手際の良いサポートも褒められるべきだろう。

後半2番目のシューマンを弾いた上埜のピアノは冒頭の両手の下降音型等力強さと思いきりのよさが感じられたが途中のフォルテの部分等ではそれが頑張り過ぎや力みに聴こえかねない危険性も感じられたのでバランスの良いコントロールが必要かとも考えられる、旋律の歌わせ方等よく考えられ丁寧であったがシューマン音楽の中にある叙情や、感傷、心の影の部分に演奏としてもっと深く入って行く表現を考えて欲しいと思う。特にこの曲は協奏曲的な華麗さを求めた曲ではなく、内面的な、そして、心理描写とも通じる曲なので解釈面では決して楽な曲ではないので纏め上げるのは却って難しかったのではないだろうか。

最後のラヴェルの牧山は若々しく勢いのあるラヴェルを聴かせてくれた。この曲の明るさがもしかすると彼女の気質と一致する所があったのか、この曲らしい楽しい演奏だったと思う。又、打楽器的奏法の箇所等良く弾き込んであり歯切れの良いリズムは爽やかと云って良く、曲の雰囲気作りに効果を発揮していたと云える。エレクトーンのおケ伴もその楽しみを分かち合っていたようである。ただピアノに気が入りすぎてテンポが幾分走り気味になる所等もあったがバックのおケ伴の桑原の臨機応変なサポート等で巧く切り抜けていたのも上手な扱いとして記憶に残る所だ。ピアノについても一言云えば、第2テーマのブルース風の箇所等、今一步粘りのある表現があれば良かったとも思えるのだが。これは勿論私の趣味的見地からだが。しかし、いずれにせよ集中力を最後まで切らさない押しの一手の演奏は充分好演だったと云って良いだろう。

終わりにこの演奏会での印象を簡単に述べる事にする。この好演を通して感じたのは総じて、出演した若い演奏家の技術的レベルの高さである。何十年前と比較した場合は尚更だろう。勿論学ぶ場合の情報や音楽教育の進化等、豊富な条件が揃ってきている環境も幸いしているのだが。しかしそこから更に上を目指すなら技術だけでなく音楽的想像力の醸成も含め各演奏家、個々としての自立的音楽表現、思考のあり方による深化が求められるのではないかと。尚、言い忘れていたが、今回後半のエレクトーンによるおケ伴の形態は特にピアノ協奏曲の場合本物のオケでない場合はほとんどピアノ2台で演奏される為、ソリストの音色が伴奏部と混ざり過ぎてしまうと云う事が良く云われてきたのだが、今回のおケ伴ではソロパートがはっきりとし、聴き易く、伴奏部も本物と迄とは行かなくても音色等豊富で有意義なアンサンブルを形成していたと言えよう。今後も進めて欲しい企画でもある。又、指揮の桑原、エレクトーン鈴木、三浦の好サポートも特記すべきであろう。

(北條 直彦 (公演局長) 記 2010 12/19)

## 若い翼による CMDJ コンサート 3 〈出演者のつぶやき〉

12月2日、すみだトリフォニー小ホール、若い翼によるCMDJコンサート3 若手ホープによるガラ及びEL2台とのコンチェルトに出演の方々に「出演者のつぶやき」と題して今回のコンサート参加について短い感想を頂いたのでここに紹介します。また、観客から多くのアンケートを頂き、これから演奏してほしい曲やELによるコンチェルトの音がオーケストラの響きになっているのが驚きだった。など貴重なご意見を頂きました。（実行委員長：戸引小夜子）



### 【前田佳代：ソプラノ】

声楽家は、自分自身が楽器なので、演奏するためには、健康であることが何より大切です。健やかな心と体で、たくさんの事を感じ、学び、表現できるようになりたいです。また、音楽を通じ、社会に貢献をする事も目標です。今、同じ思いを持つ仲間と『kiの会』で活動しています。少しでも多くの人たちに喜んでいただける演奏活動をしていきたいです。

### 【八坂寛子：ソプラノ】

今回大変貴重な機会を頂いたことに感謝いたします。仕事柄、大きな声を出すことが多く、コンディションを整えて本番に臨むということが、改めて難しく感じた一日でもあり、仕事と演奏することをどのように上手く両立させていくかが今後の課題だと強く感じました。いつでもお客様に心地良い歌声をお届けできるよう、トレーニングと経験を積み重ねて参りたいと思います。



### 【斎藤希絵：ソプラノ】

この度、二台のエレクトーンと指揮者の桑原先生との共演という貴重な機会をいただき、大変感謝しております。普段なかなか肌で感じる事の出来ないオーケストラの迫力や、それぞれの音からのメッセージを感じ、好奇心を大いに刺激されました。この経験から異なるジャンルの方達とのコラボレーションに興味を持ちました。今までに体験したことのない扉を開いてみたいと思います。





**【東山洗雅：ピアノ】**

今回のブラームスの《4つのバラード》を演奏させて頂いて、一番感じたのはこの曲の内面性を表現することの難しさでした。21歳の若者が書いたとは思えないような深い内容を持つ曲であり、その音楽の世界を感じ取るだけでも苦労しますが、さらにそれを聴衆に伝えるのは至難です。気長に修行を続けていこうと思います。

**【上埜マユミ：ピアノ】**

エレクトーンとのコンチェルトは今回が初めてでしたが本物のオーケストラのようでした。これからもっと色々な曲をやってみたいです。



出演者全員と理事長が最後の挨拶（当日）

<http://www.muzie.co.jp/artist/r009087/>

## 広瀬美紀子 ピアノリサイタル 2010

この CD は、10 月 3 日白寿ホールで行われた広瀬美紀子ピアノリサイタルのライブ演奏を収録したものであり、当日の演奏順に、以下の曲目が収録されている。

- ①ドビュッシーの第一集から「水の反映」
- ②アーノルド・バックス  
「おばさん起きてよ、パイ焼いて」／「ユーリッド～水の精」／「ウオッカのお店で」
- ③ヴィラ＝ロボス「ブラジル風バツハ第四番」  
1. プレリユード：序奏／2. コラール：ブラジル奥地の歌  
3. アリア：カンディガ古謡／4. 舞曲：ミウジーニュ
- ④バツハの「ゲッセルマイネのイエス」BMW487 “シュメリ賛美歌集”（助川敏弥編曲）
- ⑤助川敏弥、「友禅」（2009）
- ⑥アストル・ピアソラ「天使のタンゴ」組曲（編曲；北條直彦）  
1. 天使のイントロダクション／2. 天使のミロンガ／3. 天使の死／4. 天使の復活
- ⑦アストル・ピアソラ「アデイオス・ノニーノ」（編曲；北條直彦）
- ⑧ヴィラ＝ロボスの「苦悩のワルツ」



私は当日、ライブ演奏を楽しく聴くことが出来たが、改めて CD を聴いて新たな発見があった。個々の曲目の演奏については『音楽の世界』12月号に北條直彦氏による的確な批評が掲載されているので、そちらをお読みいただきたい。

広瀬美紀子は、構造的輪郭をクッキリと捉え、音楽の形が浮き立って来るような演奏をしている。艶やかに歌う旋律線とそれを支える強靱な低音部、力強いフォルテと繊細で時には透明感をともなう弱

奏との対比、「天使の歌」のフーガの切れのよいリズム感を伴った各声部間の主題の競い合い、助川作品の5月の風のような四度のフィギアによる軽やかな調べと、風に入ったような、やや物憂い調べとの対比。その演奏には強い主張とメリハリがあり、聴き手を飽きさせることがない。非常に力感を感じさせる演奏だが、そのエネルギーが最初から最後まで息切れすることなく続くのは立派だ。CD で聴いていても、当日の熱気が伝わってくる、魅力的な一枚である。（中島 洋一）

MH11-0025 ¥2,500 円 企画・販売：八王子音楽院 Tel/FAX：042-656-0312

## 時評 ウィキリークス問題などから見えてくるもの

昨年の秋から冬にかけて、アメリカ外交公電ウィキリークス流出事件と、尖閣諸島中国漁船衝突事件の映像流出事件が、ニュースを賑わせた。かつては、為政者側が知られると困るような情報の多くが、隠蔽され、正義感が強く良心的なジャーナリストは、自らに降りかかる危険を顧みず、権力側が意図的に隠そうとした情報を暴くために闘った。しかし、情報が権力者側によって都合良く管理され、民衆の側は、殆ど正しい情報を知り得ない時代もあった。主に軍部によって情報が管理されていた日本の戦前、戦中時代、スターリン、ブレジネフ時代のソ連、ヒットラーのナチ党が支配していた時代のドイツなどである。もちろん、今でも本来公開されるべき情報が為政者側によって隠されることもある。だが、インターネット時代の今日、為政者側による情報管理が、破綻しかかっている現状を、今度起こった問題を含め、最近の公的情報漏洩事件が教えてくれているのではなかろうか。

秘密暴露専用サイト「ウィキリークス (Wikileaks) は、2006年に生まれた。公務員、会社員などが、組織に不正があった時、内部告発出来るサイトである。内部告発者は、告発した本人の名前が知られた場合、処罰を受けたり、失職したり、場合によっては生命の危険にさらされるが、ウィキリークスの場合、匿名プロトコル技術や、各サーバー間の接続を暗号化するなど高度な技術を用いているため、発信元が知られる危険性は少ないらしい。危険性がないとなれば、色々な人間から、秘密暴露情報が集まりやすかろう。実際、ウィキリークスのサイトの情報量はもの凄く、英語に弱い私など、読んでみようという気持ちも起こらないが、ここで暴露された米軍がイラクの民間人を砲撃した「Collateral Murder (付随的殺人)」というビデオ映像は私もインターネットで見た。立ち話をしているイラクの民間人に米軍のヘリが砲撃を浴びせ、不意をつかれた人々がバツバツと倒れて行く。最終的には12人が殺され、その中にはロイター通信の記者もいた。

この映像は、テレビでも放映されたので、ご覧になった方も多いと思うが、あまりにも簡単に、まさに虫けらのように、人が殺されて行くのを見て、私は強い衝撃を受けた。米軍関係者にとって、一般の人々に公開したくない映像であったことは、まず間違いなかろう。

一方、同じくインターネットで流された尖閣列島中国漁船衝突の映像もテレビで何度も放映されたが、こんな風に漏れるなら、最初から公開すれば良かったのに、と思った人も多かったのではなかろうか。結局、情報を流した海上保安官本人が自

白し、刑事犯となるかどうかは不明だが、12ヶ月の停職処分となり、本人が提出した依願退職が受理された。

もし、彼が自分の手で直接インターネットに流さないで、新聞や放送局などジャーナリズムに情報を提供した場合、ジャーナリズムはどのように対応したであろうか。高い見識と良心を持つジャーナリズムなら、それが国民の知る権利を満たす有益な情報と判断すれば、その情報を公開し、そうでなければ公開を伏せるというフィルター役割も担うであろう。そして、公開することが正しいと決断し、公開に踏み切ったならば、国家権力に抗っても情報提供者の安全と利益は守ろうとする筈である。彼は、そこまでジャーナリズムを信用できなかったのか、そういうやり方が思い浮かばなかったのか、私には判らない。

この問題における政府や官庁のチグハグな対応について、野党も、政治ジャーナリストも政府の情報管理体制の甘さを指摘しているようだが、インターネットで様々な情報がすぐ流布する今のような時代であればこそ、非公開にしておくのは、厳しく選別した最小限度の機密情報のみとし、それ以外の情報は出来るだけ公開するようにすべきではないかと考える。また、そういう世論を形成して行く過程において、ジャーナリズムの役割は小さくないと考えるのだがどうだろうか。

知られたくない情報が簡単に漏れる時代だと、政府も国家も恥をさらすことが多く、また新聞、放送局などジャーナリズムも影が薄くなって来るのかもしれない。しかし、それでも為政者が簡単に情報統制できる時代より、今の方が、ずっと良い時代と考える。また、ウィキリークスのようなサイトがいつも正義の告発者の役割をするという訳ではなかろう。そこで流される情報はまさに玉石混淆であり、くだらないものも多い。となると、我々一人一人が、高精度のフィルターを持たなければならない。「情報に流される人間になるな、情報を活用する人間になれ」という、課題が、我々一人一人に課されているのだ。

(木星人)

---

## IT用語：ウィキ (Wiki)

Webブラウザから誰でも自由にページの作成・編集ができるWebコンテンツ管理システム。電子掲示板(BBS)が時系列に「発言」を積み重ねて行くのに対し、Wikiは、内容の編集・削除が自由なこと、基本的に時系列での整理を行わないことから、誰もが自由に「記事」を書き加えていくことが出来る。Wikiを利用したWebサイトで最も有名なものとして百科事典のWikipediaがあるが、その他にも「ゲーム攻略Wiki」など、色々ある。「Leak」には、漏らすという意味があるから、Wikileaksは、情報漏えいWikiという意味になるのか。

# 《明日の歌を》 — 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

## 第二回 MITTENWALD 稲原和雄氏に訊く (1)



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

二回目は、12年間弦楽器 CD 専門店を経営（本年5月末日閉店）し、自らミッテンヴァルト・レーベルを立ち上げ、日本人作曲家を取り上げていらっしゃいます稲原和雄氏に、対談形式でお話を伺いたいと思います。

### ■稲原和雄（いなはら・かずお 「ミッテンヴァルト」代表）

1948年兵庫県伊丹市生まれ。近畿大学理工学部卒業。大手食品メーカーに勤務。1998年会社都合により退社、同年「ミッテンヴァルト」設立。当時無名だったヴァイオリニス川畠成道氏と初 CD 制作をする。毎年文化庁芸術祭レコード部門に数多く出品する。

現在、邦人作品を中心に47タイトル制作。全国有名レコード店で販売中。

〈Website〉 <http://homepage3.nifty.com/mittenwald/>



### ■橘川 琢（きつかわ・みがく 作曲家・日本音楽舞踊会議理事）



作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

〈Website〉 <http://www.migaku-k.net/>

——— MITTENWALD (ミッテンヴァルト) ……弦楽器が好きな方なら、そして日本人作曲家のファンならどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。ドイツの有名なヴァイオリン製作地の名を冠した、池袋のこの店の名前を。所狭しと並んだ、弦楽器と、日本人作曲家のCDを中心とした品揃え。関西弁全開で話す、おだやかで気さくな店長。在京オーケストラのコンサートマスターなど、プロから多くの弦楽器ファンまで集うお店として有名だった。また「日本楽派」のシリーズなど、日本人作曲家の録音を多く出している「ミッテンヴァルト・レーベル」でも知られている。

今年(2010年5月末日)、12年続いた店舗「ミッテンヴァルト」は惜しまれつつ閉店したが、日本人作曲家を中心とした録音・レーベルはまだ続けている。筆者も1999年より通っていたこの店。店長の稲原和雄氏にお聞きした。

「さっそくやけど、こないだの曲な、レコーディングが決まったぞ。11月16日や。(以下、関西弁まま)」

——あ、それはおめでとうございます。山田耕筰さんのヴァイオリン曲のCD企画(日本楽派シリーズX)ですよね。

「16日レコーディング、12月末には出そうと思う。1月7日のリサイタルに合わせて年内に作らないとな。ライナーも今日来た。」

——今回はまたずいぶん早い進行で……。麻布にあった日本近代音楽館もいま閉館して、移転作業をしてますし。楽譜とか、集めるの大変だったんじゃないですか？

「ああ大変や。今回は兵庫県姫路市の方から絶版になっとる楽譜を預かっていてな。」

——うーん。ファンに支えられてのミッテンらしいですね。

#### ■山田耕筰室内楽作品集 ～日本楽派に魅せられて～

——山田耕筰さんの弦楽四重奏曲、これをYAMATO四重奏団が録音したCD、これが始まりでしたよね。これを作られたのは时期的には……

「ミッテンを立ち上げて一年弱かな。」

——それは店を立ち上げる前から考えていました？

「んー。制作したいとは思ってた。でも素人だからなんも分からなかったなあ……。」

——よく作りましたね。きっかけは？

「昔、巖本真理さんの出したLPがあつてなあ。山田耕筰・安部幸明作品の入った……。あれに驚いて。」

——そうしてはじまった日本楽派シリーズは今度で10枚目ですか。

「山田耕筰のヴァイオリン曲集で10。だから1と10が山田耕筰さん。」

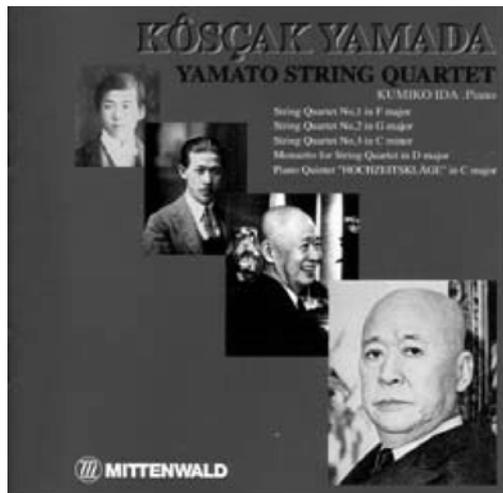
——そこから10年間で、自主レーベル、45枚。そう

いえば、今回レコーディングで使用する楽譜も、面白い経緯であつまってきたとか。

「昔から知っている人で、たまたま、楽譜をそろえていた人がおつてな。その人が上京してきたときに久々に会おうとなつて、会ったら『前々からこの曲の録音をしたかったんだ、何とか音にしたいんだ。してくれないだろうか……？』って。」

——へえ。

「ワシも探しとつたんや。山田耕筰さんの楽譜。楽譜持ってた人は今は絶版になったある出版社のコレクターの人でな。それを気前よく貸してくれて。」



山田耕筰 室内楽作品集(弦楽四重奏曲・全曲)  
演奏:YAMATO 四重奏団・井田久美子(ピアノ)  
MTWD99003

———いらっしゃるんですね、そういう方が……。

「一枚目の山田耕筰さんのCDからできた縁で。これも人との出会いというか。」

———私もそうでしたけど、色々ご縁のつながった山田耕筰さんのCDですね。

#### ■1998年、弦楽器CD専門店「ミッテンヴァルト」立ち上げ

———そもそも店長、確か、店を立ち上げる前は大手食品メーカーにいらっしゃったそうで……。

「ずっと本社におったよ。」

———何でまた、この世界（音楽関連）に？

「ある程度いると、その先がわかってしまうしなあ、定年までの。25年勤めたけれど、最後は毎日CDばかり買ってたな。」

———そうですか。25年間働いていたときは、いつかこういう感じの店を開いてやるぞー！というプランがあったんですか？

「最初、名曲喫茶をやりたかったんや。だけど、周囲に反対されてなあ。それと、ディスクユニオンの最初の店で毎日買っていた。そこで交流のあった店員さんから、仕入れから何から何まで教わってな。当時いろいろと精鋭が集まっていたね。情報交換させてもらった。」

———それが土台になって、店を始められたと。

「そのあと店やることになったらしょっちゅう来てくれてな。いろいろ教えてもらって助かった。」

———なるほど……何ともいいご関係ですね。

#### ■日本人作品を演奏すること・形に残すこと

———まじめな話になりますけど、日本人が日本人作曲家の曲の録音や演奏をもっとしてほしい、残してほしい、でも少ない。そんな思いを抱えた店長のような方がこうして自発的にレーベルを立ち上げ、録音をはじめて……。なんで少ないんでしょう？

「いや、弾かないんだもの。なんで弾かないか、最近分かった。知らないから。要は単純に知らないから。学校でもなかなか教えないしね。」

———なるほど、知っていて無視をしているのではなく。

「うん。要は結論からいえば、単純に知らないから手をつけていない。で、この100年近く続いている。そこに問題がある。知らないから無理ですよ。誰かがしなければいけないんやけど……。」

———誰かがしなければいけないというのをし続けた。文字通り「有志」のレーベルの一つ、ミッテンヴァルト。CDの録音を単発ではなくシリーズとして大きな形として残そうとして……。

「せっかく先代が作曲して残してくれた作品や。ヨーロッパと日本との差はいろいろあるかもしれんけど、中にはキラッと光るいい作品もいい演奏もあるんだから……。こういう

のを演奏しないのが、残そうとしないのが情けない。これが12年間見てきた感想。みんな知らないんだよ。われわれはこういう仕事をしているから知る機会も多いし調べることも多いけど、一般の人は大変だと思う。だからちゃんと音に残さないとな。」

——なるほど。

「あとな、初演はあっても再演の少ない状況もな。残念ながら初演だけで消えていった曲が多すぎる。音にして伝えんと……。」

## ■日本人作曲家・各レーベルの共存

——このシリーズを始めてから時期的にはあとから NAXOS のシリーズ（日本作曲家選輯・2000年～）

が出てきましたね。

「実はうちにもNAXOS担当者からレコーディングしてくれないだろうかって話が来たんだよ。」

——へえ、そうだったのですか。

「実際は、まあ、オケ（オーケストラ）だったら我々は出来なかったけどね。室内楽の曲はうちでできたけど。」

——みんな特化した自分の分野を確立してすみ分けていますね。その中でミッテンは弦楽器に特化して。店長はとことん弦楽器、ヴァイオリンにこだわっていらっしゃったから……。ところで、実際、同じように日本人作曲家を扱っているレーベル同士のご関係は？

「NAXOSともいい関係だったよ。NAXOSの企画に携わっていた方も、よくお店に来てくれたよ。」

——考えてみれば、今、日本人作品の録音といえば、日本人作曲家の吹奏楽作品を扱う

「スリーシェルズ」のメンバーもよくお店に来ていました。主に、スリーシェルズは吹奏楽、NAXOS はオーケストラ、ミッテンヴァルトは室内楽……。つぶしあわないように、お互いの分野から日本人作曲家の演奏・録音をしてきましたね。もちろん昔からこういう企画はいろいろとあったわけですが……。カメラータ、フォンテック、日本人作曲家の委嘱初演では日本フィルの委嘱シリーズ(1958年～)……。

「いま大手も大変だよ。こういうご時世だからね……。そういえば、昔、HMV、タワーレコード、ビクター、コロムビア、ミッテンで情報交換をしようということでも会合したことがあったなあ。まあ、一回だけ集まって情報交換しただけだけど……。面白かったよ。お互い資金も差があるし、得意とする分野もある。大手も現実的にやってるし、メーカーはメーカーの考え方もこだわりもある。俺も25年サラリーマンをしていたからわかる。したいけどできないこともあるし。数字をださなきゃいかんということもあるし。」

——そういう横の連携がもっと取れると……互いを補い合って豊かなものを残せる……。

「そうやな。意外と縦割り社会なところもあるしなあ。あと、縦だけじゃなく『自分の分野だけ』になりがちな世界でもあるしな。」

(2010年11月7日 池袋「ミッテンヴァルト」事務所にて)

今回は、日本人作曲家・演奏家、そして音楽に対する思いをお届けします。(続く)

ポエティウスと《musica scientia》そして『De institutione musica』

その3

— 『De institutione musica(音楽教程)』その内容をめぐって —

(3)

(1) では「音程比理論」、(2) では「音組織」、「響和判断における感性と理性」について考察しました。今回は「ピュタゴラスの徒、アリストクセノス、プトレマイオス 三者の興味ある対立点」として、〈全音の2分割〉および〈オクターヴ+4度〉の問題を採り上げ、最後に全体を総括します。

#### IV ピュタゴラスの徒、アリストクセノス、プトレマイオス 三者の興味ある対立点

歴史上特に興味を引くのは次の2点です。1) 全音の〈等しい半音への2分割〉；  
2) 〈オクターヴ+4度〉の響和性の問題

##### IV-1 全音 (tonos) の〈等しい半音への2分割〉の問題

[Ⅲ-1]の見出しに「アリストクセノスに反対して〈部分超過比〉は2等部分に分割され得ないこと、そしてその理由で全音の2等分割は不可能であることの証明」を掲げ、[Ⅲ-1~4]において〈全音の等しい半音への2分割の不可能〉の3つの根拠が詳述されます。ちなみにポエティウスの全音は〈大きい半音〉(apotome) と〈小さい半音〉(semitonium minus) から構成されています。

1) [Ⅲ-1] 先ずこれを可能であると主張するアリストクセノスに対する反論から始めます。「音楽家 (musicus) アリストクセノスは、耳にその判断を任せて〈半音とはそう呼ばれるように全音の半分である〉という。」しかし「部分超過の比率を持つ2数の間には如何なる等しい2分割もありえない(全音9:8は部分超過比)。」と述べ、これを証明します。証明:Hentschelは、「ポエティウスは幾何学的中項(比例中項) X、すなわち  $9 : X = X : 8$  を考えてこの中項の存在しないことを証明しようとしている」と言います。先ず中間の自然数17を得るために両数を2倍します。18:17、17:16は算術中項であり、18:17 < 17:16では幾何学的中項にはなりません。Hentschelによれば幾何学的中項は、現代数学では  $\sqrt{AB} = \sqrt{288} = 16.9$  です(Hentschel:Die Unmoeglichkeit der Teilung des Ganztones in zwei gleiche Teile)。

2) [Ⅲ-2]では、完全4度の比率から2全音を引いた音程は全音の1/2ではないことが証明されます(図11)。テトラコルドとその各音に与えられた数、およびその比率

192 : 216 : 243 : 256

完全4度=256:192=4:3 全音=216:192=9:8 全音=243:216=9:8 残りの音程

=256:243=小さい半音　そこで半音が全音の1/2でないことが証明されたのです。

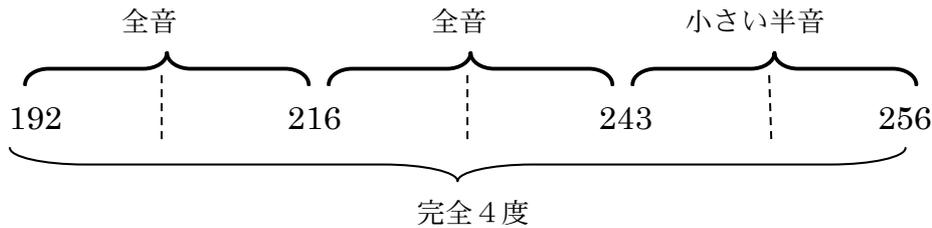


図 11 半音は全音の1/2でないことの証明

(竹井論文 VIII P.8 より 再作図)

3) [Ⅲ-3]では前章と幾分重複するのですが、アリストクセノスの4度の調和が2全音+1/2全音からなり、diapasonは6全音から構成されているという説の矛盾を突いて、全音の等しい2半音への分割は不可能であることを証明しています(この証明の詳述は省略)。

ポエティウスは、[V-5]において2音間の響きについてプロトレマイオスの意見を紹介しているのですが、この考えの基盤にあるのは2音を個別に分離した点と捉えるか、或いは継続していると考えるかです。前者はもちろんその関係が比例で表されます。後者は虹に例えられるように、その差異は段階的でなく、漸次的なのです。音楽では弦楽器のポルタメント、ピアノのグリッサンドです。この場合2音間は厳密な比率と異なって自由に分割できます。

量を分離した個々の数として捉えるか、或いはその大きさで計るか、これは当時学問分野を体系立てる基盤になっていました。ポエティウスの自然科学の4科《Quadrivium》は正にこの〈多数性〉と〈大きさ〉を基礎に区分されています。音楽は算術と同じ〈多数性〉の仲間です。算術と区別されるのは、音楽が数の比率関係を以って論じられるところにありました。Hentschelは、アリストテレス受容によって4科の体系に変化が見られたといいます。〈多数性〉に属する〈musica〉では、「響きは考慮されていなかった」のです。聴覚が重視されるようになって、〈響き〉が〈musica〉の重要な要素であることが認められ、〈響き〉のもつ〈大きさ〉がプラスされたのです。そこで全音の等しい2分割への問題へ立ち返れば、アリストクセノスのその可能であることを主張するのに対して、ピュタゴラスの徒に属するポエティウスの反論は納得のいくものです。

#### IV-2 <オクターヴ+4度> (8:3=11度) の響和性の問題

ポエティウスの『音楽教程』は、古代ギリシアの音楽理論、すなわち音体系、音楽観の流れを把握するために非常に意義深い書です。この問題も、全音の2分割の可能性と同じくピュタゴラスの徒の数学的理論(musica scientia)から、響きとして聴覚による判断を重視する真の「音楽理論」への過程を考える興味あるトピックです。「一見して些細な問題こそピュタゴラスの徒、アリストクセノス派、そしてプロトレマイオスの理論上の立場の相違が最も鋭い形であらわになる焦点であった。問題は響和という現象を音楽的・感覚的次元の事柄として解するか、それとも響和現象の根底に何らかのア・プリオリな法則性もしくは秩序を認めようとするかという

点にあったのである。」と片山は述べています（「プトレマイオスにおける音程比理論の変貌」）東京芸大音楽学部『年誌』No. 9)。この問題は、響和についての客観的立場から比の算術的操作によって演繹的に音を構成する原初の理論から音楽としての音の世界を扱う経験的帰納的な音楽理論への展開を如実に語る重要なトピックです。

ボエティウスは『音楽提要』[V-4~6]で音程の本質について述べた後、[V-7~10]ではこの<オクターヴ+4度>の問題を扱っています（プロレマイオスの原文『ハルモニア論』[I-5~7]）。

ボエティウスは先ずピュタゴラスの徒、アリストクセノス、プトレマイオス3者の、音程把握の異なった立脚点を挙げています[V-4]。ピュタゴラス：quantitas 数比による；アリストクセノス：qualitas 数比ではなく響きとしての質からの響和決定；プトレマイオス：折衷的、しかし基礎は quantitas；ボエティウスは、プトレマイオスの高・低2音間の差異に関するアリストクセノス寄りの見解として、分離した2音ではなく、継続した場を持つ2音としての彼の解釈を、虹のグラデーションを例にとり説明しています[V-5]。次に<4度+oct.>の響和性についてのピュタゴラスの徒、およびそれに対するプトレマイオスの反論、さらにアリストクセノスの理念を紹介します。

(1) ピュタゴラスの徒 立脚点を quantitas に置くピュタゴラスの徒にとってこの音程は不響和です。その理由は次の2点です。

1)ピュタゴラスの響和音程の比率[II-27][V-7]は、<倍数比>〈1:2, 1:3, 1:4〉、および<部分超過比>〈3:2, 4:3〉に限定されています。oct. +4度=11度、すなわち8:3の比率で、これは多数倍複部分超過比です。

2)ギリシアでは、和が10になる最初の4つの自然数1, 2, 3, 4はテトラクテュスと呼ばれ、最も神聖な数と看做されていました。響和音程もこの4数による比に限られます。この理由によっても8:3は響和音程から除外されます。

(2) プトレマイオスの反論 [V-8~10]では、ピュタゴラスの徒に対するプトレマイオスの反論が述べられています。プトレマイオスの響和・不響和に関する基本的判断は次のようです。「音の結合の際に、混じり合い気持ちの良い響きを創り出すような voces は響和で、そうでないものは不響和である。」「[V-7]。そして「5度と4度は響和音程であり、<4度+5度=oct.>および<5度+oct.> (1:3) は共に響和音程をなす。そこで<4度+oct.> (8:3) を不響和音程と考えるのは理不尽である。」と反論しています。例えば8:3の間に4を挿入すれば、8:4:3、つまり<oct.+4度> (8:4+4:3) の響和の比率である、というのです。

[V-9]は<oct.+4度>が響和音程であることのプトレマイオスの再度の証明です（原文：プトレマイオス『Harmonica』[I-6]）。その基本原理はオクターヴの同一原理にあります。すなわち「oct.の響和は、あたかも1本の弦から齎されるような響き(vox)の融合を齎す。それゆえ他の響和音程と結ばれたとしても完全な響和音程が得られるはずである。」のです。そして「<oct.+5度>も<oct.+4度>もこの原理の上に立てば同じく響和音程であり、こういったことは明白な経験から受け入れられる。」

<oct. +4 度>の響和・不響和に関して纏めて見れば：

(1) ピュタゴラスの徒 不響和音程と考える。カノニカーとしてその根拠を数比にのみ置く。響和音程は、倍数比・部分超過比によるもので、それも1, 2, 3, 4 (テトラクテュス) の数から構成される比に限られる

(2) アリストクセノス派 響和音程と考える。ハルモニカーとして聴覚による判断の重視、およびオクターヴの同質性に拠る。ボエティウスは特にこの複合音程に関するアリストクセノスの主張について述べていません。しかしアリストクセノス著『ハルモニア原論』[II-9]をみれば彼のオクターヴの同質性の立場は明らかです。「オクターヴに調和音程が付加された場合、それらからなる大きさは調和音程をなすことである。この性質はオクターヴに固有である。」(山本建郎『古代音楽論集』p. 66)

(3) プトレマイオス 折衷的立場をとる。音階構成の基本理念はピュタゴラス的数比による。響きの享受の面でアリストクセノスと同様に感覚を重視し、オクターヴの同質性を認めている。これについて原は次のように述べています。「<8:3>を<4:3>に、<3:1>を<3:2>に、<4:1>を<2:1>に還元している」(「プトレマイオスとピュタゴラス主義」『広島大学研究報告』1980)。

## おわりに

音楽理論の歴史的展開をふまえてボエティウスを取り上げ、その『音楽教程』を概観してきましたが、これは意義のあることでした。そこではギリシア古典の「音楽理論書」が、彼自身の考えを根底にすえて、翻案、翻訳されていて、この書はギリシア古代の音楽理論の全体像把握の為の最高の書だったと言えます。そこには自然科学の「quadrivium」の一学科であった「musica scientia」は、その「scientia」が「sensus」と一体になった真の音楽理論へ歩み始めた道筋が示されているのです。

一般には西洋の音楽理論は、ピュタゴラスの比率を基に割り出される音・音程比による演繹的音楽理論が出発点として考えられています。しかしピュタゴラスの「鍛冶屋の神話」([I-10]「ピュタゴラスは如何にして協和の比率を見出したか?」)でも解るように、彼は音程の響和を先ず耳を通して感受したのです。そこで心地よく響いたオクターヴ、5度、4度の音程原理を、弦、管、打楽器を用いて耳で確かめながら([I-11]) 実験を重ねることによって(つまり実験的・帰納的方法によって)見出したのです。これはひとえに音楽の基本本質を示しているものと思われま。つまり音楽においては普遍的・自然的・客観的要素と、聴覚を通して伝わる個別的・具体的要素を分けては考えられないのです。

とはいえピュタゴラスにとって「根源的原理は数であり、世界の存在論的構成原理は数学」(リーゼンフーバー) だったので「鍛冶屋の神話」は、音の数的原理を発見する単なる契機であつたに過ぎず、音楽理論史の第1歩はあくまでも彼の音原理・音体系を数比によって割り出す「musica scientia」です。

ピュタゴラス以後、ユークリッドはその流れの中に位置するのですが、ほぼ同時代のアリストクセノスはその歴史の中に新しい息を吹き込みました。つまり感覚を

重視する立場から観点が現実の音の認識へ向けられ、新しく〈聴覚による判断〉によって音楽理論を裏付けしました。これは彼の師アリストテレスの影響によるものです。彼は「人間は『ロゴスをもつ動物』として規定されるとはいえ、人間のあらゆる認識は先ず感覚的知覚が与える所与から出発……」そして感覚を頼りに「事実を観察し、帰納的方法を以って物事の本質に迫った」のでした。アリストクセノスにあっては聴覚こそ音程協和の判断、更に音楽を感じるための重要な担い手となりました。

プトレマイオスは、アリストクセノスの後を受けさらに響和・不響和の判断に対する聴覚の重要性を説き、オクターヴの同質性から複合響和音程の単純響和音程への還元など、現実の音楽に副った真の音楽理論への展開が進みます。

またピュタゴラスの徒とアリストクセノス派の違いを特徴付ける一つの要となるものに、算術的思考と幾何学的思考がありました。これは音程測定、および弦の分割において量を〈多さ〉(multitudo)で測るか、〈大きさ〉(magnitudo)で測るかの違いで、前者が算術的、後者が幾何学的でした。これは両派の特徴の一つの基盤をなすもので、その後の理論の中でどのように展開していくか興味があります。

こうしてギリシア古典期の音楽理論を多少学んで、音楽の〈客観的普遍性〉と〈主観的個性〉を考える端緒が啓かれたと思っています。

音楽の根底にあるア・プリアリな自然秩序〈musica scientia〉は、17世紀に数学者・音響学者ソーヴェール (Sauveur, J. 1653~1716) の音の振動数の研究、そして自然倍音列の体系立てによって更なる裏付けがなされました。かの有名な和声論『自然原理に還元された和声論』(『Traite de l'harmonie reduite a ses principes naturels』)の著者ラモー (Rameau, J. Ph. 1683~1764) が、音楽における最も決定的な進行と考える〈cadence parfait〉をア・プリアリの位階関係をもって統括するのはまさにこのピュタゴラスの徒による〈musica scientia〉、およびソーヴェールによって体系だてられた倍音原理ではないでしょうか。またこれを終止感として感受するのは〈musica sensus〉です。Cadenceは音楽の普遍性・個別性両面を備えた音楽構造上の修辭的〈discours〉の最小ユニットと言えるのではないのでしょうか。そしてこのユニットによって構成されたのが和声的調性音楽なのです。

今回はツァルリーノの理論における〈scientia〉および〈表現〉(sensus)をテーマにしたいと考えています。

---

#### 資料

Friedlein, G. : A. M. T. S. Boethii De institutione arithmetica libri duo, De institutione musica libri quinque

#### 翻訳書

A. M. S. Boethius : Fundamentals of music. Ed. Cl. V. Oalisca, Transl., C. M. Bower

Boethius : Fuenf Buecher ueber die Musik. Transl., O. Paul

#### 主要参考文献

片山千佳子 : 「ボエティウスにおける音程比理論の継承」、『音楽と音楽学』音楽之友者

「プトレマイオスにおける音程比理論の変貌」東京藝術大学音楽学部『年誌』

片桐功 : 「プトレマイオスの音楽理論における協和 11 度の問題」、『音楽学』Vol. 25



## CMDJ 会と会員の情報

### 1. 平成23年度(第49期)定期総会予告

2月11日(金・祝) 13:30~16:30に日本音楽舞踊会議の平成21年度(第49期)定期総会を、としま生活産業プラザ第一会議室にて開催します。

### 2. 会と会員のスケジュール

#### 1 月

- 7日(金) 日本音楽舞踊会議 新年会(「夢々」にて・詳細は別頁案内参照)
- 7日(金) 定例理事会【事務所 16:00~】
- 10日(月・祝) 声楽部会主催公演「2011年新春に歌う~夢と希望と、そして・・・」  
【すみだトリフォニー小ホール 14:00開演 一般2,500円】
- 30日(日) 深沢亮子-松本3台ピアノコンサート ~響け!スイートトーン~  
【君津市文化ホール 14:00開演】

#### 2 月

- 7日(月) 定例理事会【事務所 19:00~】
- 9日(水) 深沢亮子ピアノリサイタル ~ベートーヴェンの夕べ~  
ピアノトリオ「街の歌」ほか 共演:C. エーレンフェルナー(Vn)、  
A. スコチッチ(Cl)【浜離宮朝日ホール 19:00開演】
- 11日(金・祝) 日本音楽舞踊会議 平成21年度(第49期)定期総会  
【としま生活産業プラザ第一会議室】
- 12日(土) 深沢亮子-フランツ・シューベルト・ソサエティ主催コンサート  
ウィーン弦楽トリオとシューベルト:ます 他 共演:C. エーレンフェルナー(Vn)、  
A. スコチッチ(Cl)【コトブキD.I.センター 14:00開演】
- 25日(金) 廣瀬史佳&アダルベルト・スコチッチ Duo Recital  
カサド:愛の言葉 ポッパー:ハンガリー狂詩曲 他【ブライダルヴィ  
レッジ ティンカーベル(山梨県) 19:00開演 一般3,000円 学生2,000円】
- 26日(土) COMPOSITIONS 2011 ~エレクトーンのための作品コンサート  
【ヤマハエレクトーンシティ渋谷メインホール 16:00開演】
- 28日(月) 愛するこどものうた3 ~南の陽だまり~  
①11:00開演 サウンドオブミュージックより 他 ②14:00開演 木下牧  
子作品より 他【港北公会堂 大人1,000円 こども300円 乳幼児無料】

#### 3 月

- 1日(火) 原口摩純 「ショパン201歳のお誕生日」「コンサート&レクチャー」  
出演:原口摩純【東洋英和女学院大学生涯学習センター】
- 5日(土) 原口摩純ピアノ・サロン・コンサート「名曲の輝き」  
【名古屋フィオリーレ(中村公園徒歩1分) 14:00開演】
- 7日(月) 定例理事会【事務所 19:00~】
- 12日(土) 原口摩純ピアノ・サロン・コンサート「名曲の輝き」  
【ヤマハ銀座店(東京) 14:00開演】¥3,500/学生¥2,500
- 12日(土) 廣瀬史佳 クラシック名曲面白再発見音楽評論家 真嶋雄大

- モーツァルト：トルコ行進曲 ベートーヴェン：月光 他  
 【朝日カルチャーセンター（新宿住友ビル7F）13：00～14：30】  
 22日(火) 深沢亮子ーモーツァルトとベートーヴェン 共演：永井公美子(Vn)  
 【新宿住友ビル7F・朝日カルチャーセンター 13:00～】  
 29日(火) 深沢亮子 N響、読響の首席奏者との室内楽の夕べ  
 シューベルト：ます 他 共演：中村静香(Vn)、店村眞積(Va)、毛利伯郎  
 (Vc) 他 【目黒久米美術館 18:00 開演】  
 29日(火) 原口摩純ーやまのて音楽祭オープニング・コンサート  
 演奏：原口摩純 他 曲：ラプソディ・イン・ブルー／ガーシュイン  
 【名古屋市千種文化小劇場 午後】

#### 4 月

- 7日(月) 定例理事会【事務所19：00～】  
 8日(金) フレッシュコンサート2011【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

#### 5 月

- 7日(月) 定例理事会【事務所19：00～】  
 8日(日) 深沢亮子ー仙台ピアノ工房5周年記念 深沢亮子ピアノコンサート  
 【仙台ピアノ工房 15:00 開演】  
 11日(水) 作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）  
 21日(土) やまのて音楽祭：原口摩純 ガラ・コンサート「ピアノ&ゴスペル」  
 大人も子供も楽しめる音楽会 Part3【名古屋市千種文化小劇場 13:30 開演  
 一般 2500 円／中高生 1000 円 1 歳～小学生 500 円】

#### 7 月

- 5日(火) 声楽部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）  
 15日(金) ピアノ部会コンサート【杉並公会堂小ホール】2台Pf.も可能です（詳細未定）

#### 9 月

- 15日(木) オペラコンサート2011【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

#### 10月

- 4日(火) 20世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景Ⅷ～  
 【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

#### 11月

- 12日(土) CMDJ若い翼によるコンサート4【すみだトリフォニー小ホール】（詳細未定）

### 3. 新入会ごあいさつ

中西淳子（なかにし あつこ）

賛助会員（ピアノ・The Music Center Japan Inc. 代表）

この度、理事長の戸引小夜子先生のご推薦で貴会の賛助会員にさせていただいた中西淳子（あつこ）と申します。戸引先生とは以前ニューヨークセミナーにご一緒させていただきました。夫の仕事の関係で84年にニューヨークに行ってから、ジュリア



ード音楽院の故ジョセフ・ブロッホ名誉教授とは大変親しくなり何回も互いの自宅を訪問し合う仲になりました。神戸女学院大学音楽学部ピアノ科を卒業して以来、“情操教育の一環として幼少期からクラシック音楽を”を目標に東洋英和短期大学や横浜女子短大でピアノ非常勤講師を勤めましたが、ニューヨーク赴任で退職、帰国後、横浜の自宅にThe Music Center Japan (=TMCJ)を創設し、夫の定年退職で湘南国際村(横須賀市)に転居してからは夫とともに国内外の著名音楽家を招いてリサイタルを開くなどの活動を続けてきました。その模様は既存ホームページ、[www.diana.dti.ne.jp/tmcjapan](http://www.diana.dti.ne.jp/tmcjapan) をご参照ください。HPの制作者である夫はクラシック音楽に関してはまったくの素人ですが、素人なりに音楽評論を展開しています。現在、自宅とは別にTMCJの関西拠点として兵庫県芦屋市に音楽ビル、Salon Classicを建設中で、年内には完成、来年初めより広く音楽家の皆様に音楽教育と演奏の場と機会を提供すべく貸しホールを中心とした活動を開始いたします。新ホームページ、<http://www.tmcj.jp> も開設しました。では今後ともよろしく願い申し上げます。

#### 湯浅照子(ゆあさ てるこ) 賛助会員(オルガン)

東京都出身。幼少時、兄山本直純等と共に、両親より音感、ピアノの手ほどきを受ける。連弾をよくした思い出あり。戦事中、母の急逝、疎開等で中断し、自由学園に学ぶ中、礼拝のオルガンを弾き、オルガニストを志す。東京芸術大学器楽科同専攻科卒業。オルガン専攻。ピアノを田村宏、オルガンを秋元道雄に師事。日本オルガニスト協会会員。自宅で幼児音感、ピアノ教室「クララ会」主宰。年二回の発表会を続けている。カンバーランド長老成瀬キリスト教会で奏楽、超教派聖歌隊「エンジェルコール」伴奏を30年務め、多くの教会やチャリティーコンサートで奉仕を続ける。1994年父、山本直忠「帰天30年記念コンサート」を企画。ヘルマン、ホイベルス作詞、山本直忠作曲の、「キリストの受難楽劇」を、エンジェルコールの合唱、有志、親族を中心のオーケストラ、指揮山本直純、オルガン湯浅照子にて再演。



芸大時代より親しかったフジコヘミング、帰国後は手づくりコンサートをバックアップ。人前に自分が出るより陰で助ける事が性に合う。方角音痴は自他共に認める。動物と子供が好き。今後、時間と体力が許すかぎり、「CMDJ」の催しに参加させて頂きたくよろしくお願い致します。

多賀城の動物チャリティーフジコ弾く猫のレクイエム亡き子偲びつつ

作曲者助川敏弥愛猫(あいびょう)の写真片手にレクイエムを聴く

## 編集後記

あけましておめでとうございます。20世紀に入ってから、もう11年になります。ここで100年前、50年前にどんな出来事があったか、歴史を振り返ってみると、100年前の1911年には、アムンゼンが人類として初めて、南極点に到達しています。そして、50年前の1961年には、ガガーリンが人類で初めて、有人宇宙船に乗り地球を一周していますが、まだ記憶に新しいところです。その時の彼の言葉「地球は青かった」は、世界中を駆け巡りました。その頃を振り返ると、今よりずっと夢が持てた時代だったような気がします。しかし、今はそんなに悪い時代なのでしょうか。確かに目の前には厳しい現実が立ちだかっていますが、いつの時代でも困難はつきまといまいます。ですから、希望を持って前に進もうではありませんか。会員の皆様、読者の皆様、今年もよろしく願いいたします。

(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

---

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

---

### 音楽の世界1月号(通巻525号)

2011年1月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：美二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間:5000円 (6ヶ月:2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします